後京極殿集　一

完

うを佛すゝ
し一句本と
あ上ぬときはのえ乃
しくすゝるみかしくて
ニ新ゆ乃みしらよ
もゝとせ

花月百首

花五十首

昔し誰かゝる桜の種をうへて吉野を春の山となしけん

谷川のうち出る浪よりも花ぞ峯の梢と成にけるかな

尋ねきて猶花と思ふ葛城山霞のほかに見えし白雲

花ならぬ外山の峯の空に出る春風にかる花の白糸

龍田山秋かりみむ錦かは春もあらし峯に花咲にけり

出て見よ峯の白雲かゝるたに又此山の花ざかりかも

御山をいつとみる海の辺はなれぬ浪と花との見えまがふかな

吹よりの波に花の香ぞ知る山風

秋は麓の薄に音きこえし峯の尾上の松に桜一むら

雨そゝぐ外山の梢わかれにし遠の春風

世の中に桜まさらぬ花ぞなき春を待ちける人の心に

九重の花のさかりに成ぬれは色に色をそへて世にめてたし
さかれはこゝろに桜さくらも世の春のこゝろをあかぬ
禁庭の花はさかりにて昔より人のこゝろをよせて
詠くは南殿の桜の花さかり夜の木陰に桜はちらぬ
誰とかくましてや人をさそひつゝや桜かりそ来て
都人は家々や我もと思ひ花は身にそへて
今日は逢坂の関のこなたへ人の花のさかりを
宮の内よりの花の盛りまて庭の花に風をいとひ
事なく春の心をさそひ家々に白河の花のさかりまて
ところ／＼文をさそひ来て花をさかりの頃
春は吉野の山よりは花の木の花の陰は
霞ゆく峯の木末を見てかくもありし山のはの西ち
あくかれぬる心は花を待て君か代の花の時を
おもしろき花は木のもとにて宿の花の咲くを
むかしの花の宿の桜にてうつる春の
待ちゆく花や人のこゝろや花のちる
此春の浪にも花の都に君もまた花をちらす人
いとゝ春も桜の花の色をみて花のいろを待
さかりにて吉野の花を待ちはやしても花の心を
花は吉野や霞の山のはなのさかりを待つ
しかるに花の色は吉野の花の嵐に花のさかりを
ながめにも花はさかりを散る事をもて吉野の山
花の桜をみて花の色にさそはれてや人のこゝろ
春をもすぎて花のさかりを待つ花の

父も母も此世にかへる夜半とてもたのもしき哉たのむ山もと

花も紅葉も世の外と思ひしはかりの秋の風の音さへ

吹風や雲ふかき峯の吉野山雲にあまるもの白雪

高砂の松かりつる風の世を尾上の花のおそき…

うら風に花やおそき志賀の山高ねの奥にしら浪

雲と見しこの山の花は咲にけり吉野の山の峯の白浪

高根より吉野の梢咲にけり松…

山桜…の岩根に桜を…ひきて…

風ふけばもろき白雪の…春の夜の風

わけ入れば山は春の風ふきて心にかゝる…

花ちれは…人目も…この山の里の春の曙

庭に散る花は雨に…本…

苗代の水まさるらし雪きえて山田の畦に…

みよし野の山のさくらや…春の雲…

入新拾遺

高砂の尾上の桜咲にけり春霞して松の…

月五十首

…月の秋…心ありて萩の花…

大空に…風も秋の夜は月ゆへとのみ…

春夏の…長き夜の…月は秋にて…

入

さらぬだに…秋の夜の月より…

庭もせに…

月影の…

…月…長き夜…

里…夜…

月

かゝるまゝにおもしろき事もなくて月をさうさしも秋の夕ぐれ
すみのぼる月かげの空をなかめて須磨の月のさびしさのかぎりに
あかしの浦のうら松をとさして月影すみて真澄にて流れ
更に心ある海士のすみし月影なみかすみのうら
おのつからなく浪に苦しくて真如の岩にすむ月の影は
むしろのうへの塩やく煙もたえて月影をもみるかな
わすれじや心をよするも海山をへだてつゝも月のかけの宿
唐土の浪にうかぶも[illegible]月ならぬ[illegible]
さるころは出[illegible]月をしてそ首の露
残る光[illegible]姨捨山にすむ人は[illegible]月やとふらむ
さらしなの月や[illegible]宿の露
月毛の将続の[illegible]の気色こそ

むかしの花もさそふ嵐のやうに菊さかりて吉野の月も神さびてすみなん
さらぬだに都にも旅寝の床を露けくも[illegible]月は
あらしや白雲の[illegible]月影[illegible]露のしも
入風にも[illegible]秋の夜の心もうらめしき松の風
さびしさや[illegible]月[illegible]心のそこ秋の夜
小倉山に[illegible]人の[illegible]秋の月の影
いとゞ[illegible]板屋に風[illegible]秋の夜は
たえま[illegible]月[illegible]
てる月を[illegible]
もろこし[illegible]月の影[illegible]
古今に[illegible]秋の夕[illegible]
いかなる[illegible]月[illegible]衣

いつるをはにかはすもなけれとものりしたかれこそおもひやりけれ
ならはすも春日の霞の空に曇りてその名のみなる秋のよの月
さらしなや心のたけにあまりぬる我のみ月も見るらんとそ思ふ
まつ人もなかりし夜はの松の下に涙やこほるる月ひとよとそ
秋そらしさよふけわたる心つくしの月のつゆ
うちせとは流しさらし波のかけにも月に影とりとむる
うちそり思ひしきかはの月なみにはかなく秋のかそふるそ
中々に月のなかめそ秋の夜はなかなかにこそ見ても思ひけれ
いふ見もはかなくひとりゆく末の又こそ秋の月なかめし
うちせいはよ心やせむ秋かりもうしの月
おもひ雲井の花よりまさる山のはにかけさたまらぬ月の月
紅葉ちらぬ山の下すみにかり月のかけまちも

谷ふかきむかしのおもかけとてもしもかる月のひま
むすひしよそれてこの木の葉をかしこの嵐に山陰の月
さ夜ふけて秋嵐の音に出てかひて木の葉のの月すみのさき
人のかの小なかりけり月ひかりてまても秋の夜のふけゆく村雨のつ
七月の人の月の月の山のかけたれまつ人なかむらん
秋をうつる人まつかる夜もさへ月いさしくも見えぬ

二夜百首

霞五首

ひさかたの雲の木のまの春もかすめる空にたちかへり
おのかなる空に春の山かすみゆかぬ見れは月のかかりにたなひく
山里のそともの思ひありとかすみゆかぬ小みちする鶯の声
谷がはのおくにすむなる山人の春のこころもいかにかすまむ

りさ位くうし竹のも月と見る行ふやなくて千ぬ遊女の姿の

梅五首

ちれはまた宮の梅か香立てかりひしともへのまくらとへ
鶯の初ねのみとなりぬはその森ちる林乃雲ゝを
我宿は梅ひとつりて立かへる花のかをりし人やとふとて
けふ伝ふ梅もハ空の山里ひとりて雲の山を
朝風の梅の香すゝしく風ふきてにほひのみえし春の雲夜の月

帰雁五首

春ことにかへるかりかね帰る雁のこゑしてふるさとへ
あはれなる風にまかせて雲井なる我もわりなや海のかなたの
さくらまくかへるとおもふ雁かねの明方の

鈴かせへの波も浪の山をしのひ乃まの月のこゝろ
ゆきもとの秋かせのさえはなむ稲葉の風の秋の夕暮

照射五首

足引の山の茂みにかくれぬ鹿を待つあはれ夏の夜すから
とりすゑを山の下山里をゆふくれてそれ毎のほとけ
ともし火のおもかけ山里の夜はともしやこゝろの跡をまつ
流世のこのもとの衣のたもとのかけてまつけても
秋の夜もまさる鹿のこゑをまとりすへをともしのつけ

納涼五首

見せはなる夏の月にしのゝ花さへみな夏草をたゝれかけり
奥山のあつさもしらぬ秋の色みえすむ谷の水
いはなきせきの羽衣いまなれて夏の夜秋のはての月

ちるはいつ秋しるはのつゆをそへて袖のうへにみえすもあらし
ひとむらすゝきのしたはかれすゑは一本かゝるに秋風そ吹く

霧五首

さとやまにかゝれる霧をわけゆかん千里はかすみ音の
ゆふくれて山もとかすむ霧の中に山里の音にたつ秋の夕暮
秋はまた霧にまかひて雁かねのなきてすくらんやまのへを山
なかつれしやまの霧にかゝりて音はたれにかとはん山せ
音羽山みねの霧にさそはれて月のかけそやとるらん

鹿五首

時雨山をのへにさを鹿の音そ秋のよをまちてあらし流る
夜をさむみさを鹿のなく秋山はあはれをそへてたれかきくらん
松風に鹿のなくねのきこえけりまつ人もなき秋の夕暮

いまはとてかりたの風にさそはれてをのへの鹿のなくねかなしも
秋はなほ人をのみこそうらみけれ月影さむくさやかなるよの

擣衣五首

ものおもふ衣うつ音にたくへてもかはらぬ月のかけそさやけき
山のはの月もすみゆく秋風に衣うつなるさとのよさむさ
夜もすから衣うつなる音きけはあはれをそふる月のかけかな
秋の夜の月にこゝろもすみわたりよもすからうつ衣の音そ
つれなくもあらしの風にうちまかせ衣うつなり秋のよそ

時雨五首

かきくもりまつ夕ぐれのしくれかなそてにもかゝる秋の夕暮
かはりゆくあきのなこりをしくれにてかくやはしつくらん
行すゑもあくかれつゝ時雨ゆくよしてはやとるらんこゝろもしらん

あわ乃気よたゝみむる時雨仏林なさ枝小よみハのこゑりらく
きれふ夢ふ卯れ志宮れ色さ乙しハれやうしるれ初雪の空

水鳥

志乃の浦ふ来もよかつる浦々色ハおもまのころさし浪乃ろよ
大井河の瀬れ岩かくまて、ハ岩のこうつよ風こかる色
はまみれし沖ハおひるも明しさて皆るれよる月影を
山姫のきの此ろこ立かるゝ清瀧川れ岩もさうしき
難波ゝと入江のわつれ花れて、おもなかる森の中よ山清

寄雲恋

志らね山みゆらる影ハ碧つてむらしハ入りおひゆる柳を
こゝろひさて入日れ空を珈仍雲れ、もえをすることもなさ
もるれれ恋れ煙やなるをくなるよみちるる夕風のそく

恋しれ人のあとをもしハ人ゆ宮を忘れ須ハ去れ宮の林雲浦なれ小ひよ
おかつき此風よわりゆく雲をわ寄りゆく神のたえいとそる

寄山恋

入あゆの此の山わとむれおやわのふし心ハこえし心まりきり
志るやなすにて松山こすなれなれもこて万神の気絶
あひちゝへし浦れ山ア此よつてけハたてかし中れ身絶れ
なれすて此山ハ心れよりちるれやたのわね枝すれ月日の絶て
消しちさし此わりひね寄れ須をしも清るも焼なて丸

寄河恋

むすしたりあをすそこ関寺小るるものの稚しめれよとしそてやハ
いまさ女人渡りうち川れわしろ手ハ心そよ守する人のあれいつハ
ひら世川神流くはるりわさ来ふそたてハ一しま結び瀬流れ

石はしる滝のみやかうちにしきしまの玉ちるかたに松のたえせぬ

あすか川淵と瀬となる世なりとも神にいのりしひとそつらきと

寄松恋

我しみよその松まてつらきひともと松ときは(にも)きこえたとそ

松しけき松まて千代のねのひにこころのとけて夜の

さはのせきりかねつる人のほかもいはまきをいとふし松

あはぬ人をまつにつらきもおもひの波に

流るる涙かはおもひの波に松の千代まてうきはてかなしき

寄竹恋

君ゆゑに虎ふす野へにおりたちて竹のはやしの竹に

わか(身)もかくてひさしき山ものあはれをこる世のなか

よそにのみ人をいとふも世そ竹の世の(ふし)のきはみぞ

節なかの事を見ても恋しきを思へはさらにかなしき

恋よはる心のほとの(つき)に行わたる山はさらにきかず

旅中眺

宿は庵は都のそらもかはらめやいつ行人のかた

春の日のかけしらすゆく旅人は(ふ)るさとしのひて

すきゆく旅の花はいつしかみゆる野とせしは秋の夜に(まさる)

見(ね)あらしのけにそつるかへらん千里の空の(ゆき)

春も秋もたえぬ旅人はなにしろきつつ旅人のみ

旅泊月

ゆく(へ)も見えぬ浪のまにまにあかしかたしのみ

いかにそもしらぬうきねの床にあたなる

うれしさもかはる心をしらせつつ波にゆられてかはらぬ

みしかき夜半を思ふかへらぬ夜をそや旅にねられぬ

跡あれや青葉の花はちりしもそのなこりなる苔の下道
行かよふそてのひゆる松か枝にかゝる嶺の雲

佛寺五首

かきくらす朝日もうはれてそる野のかくれにの有明の月
空に満る人の心そしらぬかなそてのかくれ山寺
鐘の音やひゝきの枕をとりかへ年のかさなる月日の今をなりてゆく
暮まてとつかゝりの鐘やつりぬらむ宮の林にかゝるしら雲
深き夜の鐘の音しきりにきこゆらし峰の山寺

山家五首

山里よ心のおくのわかさても色くりかへる夜さころ衣
おもひつるたらふみの都には身とも苔と忘られし
松の苔よ[illegible]もたえしる袖のあとをかしこやうらむらし

山路には[illegible]かへりてあかぬ[illegible]の月[illegible]
心ある都の人も山人となりて[illegible]旅そわ

海路五首

あらき浦つたひ[illegible]や浪にしも[illegible]風をいほ
さりは[illegible]の浦の松風に[illegible]
秋の夜の長き[illegible]の音にしたかひて
かり[illegible]浪[illegible]や貝の
わか[illegible]のまゝしや[illegible]きそ

建久元年十二月十五日 月蝕 於内裏直
盧詠之夜一晩始之巳終詠六十首同十九日
戌終之程始之子剋終百首各稱
於不詠之後一首不廻風情者也

十題百首

天象十首

天の戸をおしあけかたの雲まより神代の月のかけそのこれる
久方の雲井はるかに行雁の山はかすみのこなたにそなく
時しもあれ星のやとりのかはらすはかりのそらの月をみましを
秋の夜の夢絶てよもすからなかめにやるゝ月の影をまつかな
ありしよにかはらぬ空とおもひしにはてはしくれて白露
かくてよも我涙にそ秋はさひしき風音てら人のすむらん
秋はなほゆふまくれこそたゝならね心のそらにあまるものかは
吉野川おかしも岩浪のくたけてはちりかふ霞なかるとも
おもふなる人の心よくもるとも君の光はへたてかたらす
春来ぬと秋の月さへおほろにてこゝろのそらに雲のゆくらん

地儀十首

吉野山雲もかゝらぬ峯の世にあさる嵐の音そふけゆく
たかさこの浦の松もこゝろあらはみなとのあきのはつかせのおとせ
白浪のかゝるいはねをきよみ河なかれてたえぬ山の井の水
大井河のふきはやせの桂川かねてやしらんしほらしく月
ありあけの月のはつかに見えつゝなれるをとめの袖のまかき
やまかはのいはまにのこるあきくさのうつろひゆくをしらさらん
みよしのゝ神のさかきのしたふかく年ふるとしの名のみたつ
秋はされは木のはにかはりゆく秋のあはれをしらするかな
まけてうつ雪のしらゆきつもりきて山のかけさへ白き白雲
見わたせは浪にしつむゆふ日影あやにくもれる月のさよ風

居処十首

百ゝ鳥やおのれてふにて川の岸にきこゆなるは人
あめのした何事も世の嘆にて民の心と代をしらぬ
秋かりの人うへふくみちのくのえぞの里を
まつ…の袖の露のこのはをはらふ
秋の夜の月に恋まさる人のたもとを
つゆ…山里の松の下葉をなきて
山…のちよにかはらぬ田りの庵
雨…の雲にかゝりてしら露の
ゆふ…すみて…世のはて
山…の…くもりて…の袖

草部十首

朝…の…の葉のつゆ…

さよ衣…の秋よ
秋の小萩…風のおとよりもまさ
…をみなへし…秋風そ
うつろふ萩の露…秋の庭
…野の葛のうら風そ
…人やそこの秋
…秋…
…葛や…
…のかゝる…

木部十首

春…桜…山
むかしの…もみちの風の…

入日さす外山の末の柳けふ川をわたりて帰る[illegible]かあり
月まよふ神のみまへにてらしけり松のしつえの[illegible]
月影も清き流れの水の上に松の色さへ見えて庭の末まても
あすの朝の心にかゝる秋風はさそはれてたつ人のゆくへを
かつ見ゆる鹿の声にまつ山の奥の紅葉の[illegible]
[illegible]今宵てかゝる雲の[illegible]
山のはに[illegible]のかけも[illegible]桜はかりの[illegible]
冬の夜の白雪積る[illegible]のいく[illegible]

鳥部十首

萩の花[illegible]の[illegible]秋の風[illegible]
[illegible]心[illegible]一声は枝の[illegible]
秋の花[illegible]つゝ[illegible]のたてゝ[illegible]のまち[illegible]

秋の夜の[illegible]我も[illegible]の籬の野へ[illegible]
[illegible]小萩[illegible]山の[illegible]まよふ
[illegible]心よいかに[illegible]秋の[illegible]
風[illegible]ふかき夜[illegible]
[illegible]秋風に[illegible]秋の[illegible]
[illegible]山田の[illegible]の一声
[illegible]山に[illegible]

獣部十首

山の[illegible]
入[illegible]花の[illegible]
[illegible]山に心[illegible]
[illegible]

有明のひかりに草かれ／＼あはれ頼めてしのふ郁
わりなき風もおもふらん都まてとゝきし松虫の声
あはれならぬかたもまた露のこゑも鈴虫のこゑこそあはれなり
たへかねて入そかの声の秋のまつむしよもすから鳴世の
世中は尾花をみなへしなくらんとなくむしのこゑもおほゆれ
後の世をおもふもさよふけて月の有明の

虫歌十首

夜宮の春の初にかりそめに世を蝶の今はなき
国はてし秋の草むらにすたく虫のはかなくて
夜の衣は袖のつゆのちるまにたちもまよふ松むし
大空の鈴虫の風のこゑは心あはれに聞える
哀へは蛬の羽衣ぬきて捨ていまは秋のひくらしの声

露ふかき草の野への松虫のなくこゑをきゝてぞかなし
ひとりねてやみの夜すからなく松虫のこゑもかなし
秋の夜ふけてさひしき虫の声／＼くるは夜なきの声
明ぬとも猶なきよわる虫の音はかなしきは虫の声
有明の枝にかかる蛛のいとのうきを思ひ出てなかるゝ

神祇十首

千はやふる神のみつかきもさかきはふる世の誓の秋
月の夜は秋の夜ふかし今宵そ神の心そ
明からもまつむしのこゑも神の世の
いつも岩根の松村にかけて神のめくみは
うき世をも神のめくみにかけて神のまもる
みやのまへにもつかへて神世の松の葉

学も名し異見の法わかれゆくハやさ此葉もそよくさゝらなや
神垣やかゝる此濱の風よりもうらみそふさゝくて[illegible]
雲之ハ法も今の寺まても首の詠偽とそまゐる
まれよ我経を読し倫羅山らし首なやたのことそあるき

釈教十首

地獄

しるへもとうわか結ひてゆくよみとひかれきまよひ[illegible]

餓鬼

身は我をしらぬ人のまとひねて子の迷ふ身ちそえなきめなり

畜生

きつまさてこ雲みゑかけの心くらへしも世の後ハいてう部しき

修羅

みなそし心のみち乱来ハ又なしまる海の底にしむ小

人

夢の世ハ月日をかくしゆくみなもさゝ八えくさ訳[illegible]

天

むなしく終の今後我我えへく父かとらつわの羽衣

声聞

きてもかくしさそれの法もしゆし此の山の法のおやの八

縁覚

竹くの露しきりの法ほのさもりのまさくて風よかかて

菩薩

秋のはなくハひとの我落してまて乃く嶺て結ふ倫まき

仏

ゆくへしく雲ゐに晴つきてまとふ人もあらしなれ

歌合百首 六百番

春

元日宴

勝
わかれぬる年の雲ゐにむまれてことしもまつ君か代をみきはまる世

余寒

入 勝
霞かね今ふる雪に空とちて春ものふかき埋火のもと

春氷

持
春の日よりけふ日影やうちとけて後松かせのをとにかはるらむ

若草

持
昔みしかれ野の若なつみしも今日しもあらす若草の色

賭弓

勝
あつさゆみひくてもしるしもろ人のあさゆふたえぬかたきいつわり

野遊

勝
数ならぬ身はいつの春の野辺にいてゝ見るかひもなきかな人の心よ

雉

負
武蔵野のをちかたすゑやこのりかきのかみのかたにむかふらん

雲雀

勝
かへる鳥の霞にたかく行末のきえていかなる山とほくひかる

遊糸

勝
雨はれてそらをもしらすいとゆふのけふもたちそふ春のかすみに

春曙

入 勝
見ぬよまて思ひのこさぬ詠より昔にかすむ春の明ほの

遅日

入 勝
秋の夜の八月長きうらみまし桜まつまの春のくれかた

志賀山越

持 さゝ波やまた夜ふかくて越る花ゆへ志賀の山路

三月三日

勝 おりにあふ花の[illegible]ゆへに流れ[illegible]春のさかつき

蛙

勝 夜もすから池のみきはに鳴蛙[illegible]

残春

持 吉野山花の名残をしたひてや[illegible]春風そ吹く

夏

新樹

負 花の後[illegible]月[illegible]庭の[illegible]

青草

負 名も高き[illegible]風[illegible]

賀茂祭

勝 [illegible]けふ[illegible]川[illegible]

鵜河

持 大井河[illegible]鵜舟[illegible]月に

夏夜

勝 うち[illegible]山郭公一声のかり

夏衣

勝 かくて[illegible]夏衣[illegible]月影

扇

負 [illegible]秋の風[illegible]

夕顔

貞
かくし山家垣ねの日影のこして露にうつるかほる夕くれ

晩立

入 勝
いり日さへみ山のはら八雲にまかせ嵐にちる夕立のそら

蛍

入 勝
新古い
ちるきみのほたるかくる露の秋はけく本の影ひき夕暮の空

秋残暑

勝
うちすゝむ涼しき秋は来ぬれともなほ柳かけ

乞巧奠

入 勝
星合の空はいとかう八雲の井は庭にてもえことの火

稲妻

入 勝
いかなれやあれたる宿はしらぬに稲妻かけてあきの露

鶉

入 勝
風さむきをきのはすゑの露にちるなくてや鳴鶉かな

入 勝
ゆふまてよるのむしのこゑ　かれ野もすゑにそよく露のあきかせ

秋風

勝
ゆふくれの小萩かうへにかよひ来て萩の上葉にそよく風

秋夕

入 勝
物おもふてかゝる寂しさやいつくにもみなさひしき秋の夕暮

秋田

入 勝
山かけの田井のかりほに露そひてかよふ明の月

鴫

勝
沢にすむ鴫の羽風をいとひて風まつすむ鴫のこゑ

底沢池晩空

心なき人やむかしもしらさらむあはれはしるや鴫たつ沢の夕暮

蔦

持
宇津の山こえし昔の跡絶てつたのかれ葉に秋風そふく

柞

勝
ちる柞原しつくも色やうつるらん木枯の下葉は秋そ又よそ

九月九日

勝
雲の上ありし昔のうしろの白菊をさしゝ人の袖にかほりそ残る

秋君

勝
君とみし秋の林のうつしゑは小篠原風にふきにかはれぬそ

暮秋

持
立田姫いまはかきりの秋風に時雨はいつく人の袖の跡

落葉

勝
みえて
ちりしらん木の葉はさそひ行てもをくるゝかたそしくれ嵐の松を

残菊

勝
さかりの花をは菊にうつしとめて籬にしもの色かれの比

初冬

勝
入し秋をわけにおもへる木枯は紅葉ちるにも時への音をそ

古真

新続古今
勝
風さむく今はふしみの花もなし吉野の山は時雨そ深かり

野行幸

勝
大井河の浪も昔に立かへりみゆきまつとやをくらの山を

冬朝

持
雲またき嵐の空はいかならん横雲しろき富士のたかね

寒松

勝 志くれつる雲のかへるそこらえてしわせにかるか家の松風
負 山里はさひしさ思ふ蝉の声くしくと家の椎葉
椎葉
勝 さ夜ふかき此寺の鐘ひゝくなり神の御心やひゞきて
今夜
持 一年の罪をいひけるさかぬかん三世の仏も仏もひゞきてよ
仏名
持 志るき思ひ我恋草や志げるらん袖の露には
初恋
勝 白雪も見えぬ君か家の袖は時雨もとへはそふる哉
忍恋
新右 寄恋

持 君かこゝろ人のこゝろきく此比は恋にしのぶるらん
見恋
持 恨みても逢ふ夜の人はかくさふものそれ知らじ恋の葛の葉
恨恋
持 ならひなき心のみちを見する身よ枝の根の契のみ
祈恋
勝 ひとり寝し我袖のしたにまさる思ひ川袖に玉散るらん
逢恋
新右 いさゝかも心さはる身のはてに花よりも猶まさる袖の縁
待恋
持 よしさらの末も氷の波之かな世にとまらん物かは
遇恋

持
かゝる夜かさぬる袂もしをれつゝゆく世の露をさらにしらなん

別恋

勝
わかれしの後はたのむも別れは月にまつさへ人そ

顕恋

勝
神かけし胸の緒はさしもみな我からまつ名にそたちぬる

稀恋

負
おもふ夜の卿のつゝむ青海をそ又わかるまてふる秋のよは

後恋

勝
やまひよ我もしく人のあはぬ恋と言ま勝京ともふかくなれ

怨恋

持
涙とよる袖もさらぬあはぬつゝうらみぬる袖の露よ

[illegible]恋

勝
すゑまてといひしはかりに濱千鳥京やとも我かたに袂やくちて雨

晴恋

勝
月やそれはかのゆふ人は面影をさへ見し人きはあかつきの空

外恋

負
白雲の旅ねの神のおも影の我まちしに日影よ消ぬ空に流れくゝり

昼恋

持
おもはりくへんひまもりて物思ふ日もくれぬらんと涙せきあへす

夕恋

持
見そ又夕ゝかやうに来てゆかしくきえかねつゝ袖に雨なり風

夜恋

持
見し人は行くに立ちし面影の涙にさへやうき夜の明まくらし

老恋

勝
夢の間はいとふも能し続たる我世もあはれしる物ゆへ

初忠

勝
月まれ姑きえまよそ験つゆきこむまてれ哉るよ私なる

季忠

持
花ひとつはあわりにつけくいひやうまき年へぬらや人ぞうれ

近忠

負
わかまは人恋きこゆる松をよそに吹ふもつまき萩の葉に

勝
花も紅葉も落はちりてひとりのまきの宮の中山

猿忠

勝
神の人またらもへもの秋人は六郎と宿せなか秋はよの月

景月忠

景雲忠

持
春の夜とう殊ぬる心まよふらく人をまちいく風をまてし花

景風忠

負
引く
いつまてもむかへのかりふく人きやまた景は秋をはらえ
松

景雨忠

持
今まよは野は景は行くそかえへても花わまきはる神は雨に

景蝶忠

入勝
恋のひと逢恋の前にまちこ嬉みきそやふての暮にまなん人て

景山忠

入勝
まちの松あよふくるひるまも渋山こす流て神よまちせて

景海忠

入勝
よき海の臭津かは風にふけまち我うちと人へまきる人てら

景河忠

分 新勅撰
吉野河のやまぶきさく岩ねのなみの中にも花のいろそふらん
吾実意

分
あつき日にみつの宿の野辺の空よりもすゞしき月
吾梅意

分
匂ひくる梅の花さかりはやわがやどの梢

吾草意

負
人まちし庭のあさぢに露おきて心をよする袖のつゆ

吾木意

分 新古
おもひやるさかりの花も吹風にちりなむことを惜しむ

吾鳥意

負
時しもあれひとりながめてかなしきにさやけき月やまたも見えなん

吾獣意

持
おのづから心なきみも身にしみて鹿鳴の秋の夕ぐれ
吾虫意

持
つゆふかき中に秋はぎの花ずりの袖はかはきもせじ
吾笛意

持
笛竹のうきふしごとにつらくとも声きゝてやまじの
吾琴意

持
三とせまで聞きなれし琴の音は今も耳にのこるらん
吾橋意

持
さすらへて人すまぬ野の一つ橋
吾衣意

負
うつせみのからにもにたる衣手にまよふ人のこゝろもなし
吾扇意

わ
人をわかれゆく旅人のもとへはるかに見おくりて秋を

寄旅世恋

かくれ行くよそにて旅の袖ぬらす涙に袖ぞかはくまもなし

勝

寄偏偶恋

持

一夜のみ宿かる人の夢とても結ひとゝめよ草枕かな

寄海恋

入勝

塩風の吹上の浜にまよひつゝしほるゝ袖の浪のかゝれ

寄旅夏恋

持

忘れてもなれしや人のさぞよみかはす台の上のあかぬ中とも

寄商人恋

負

ごしきの文は秋の月とても行かはりぬる人やあるらん

作義百首

立春

緑ある春はかぎりなき時のまの松村ちる梅花のにほふ

冬の雪池にも消えて神代ふる春はのどかに

新古今 春歌

三芳野は山も霞みて白雪のふりにし里に春は来にけり

わかみどり松に春は天の香具山霞のたつや春さ来ぬらん

続古

出るより白浪岩にこゝろして清瀧川に春風ぞ吹く

鶯

春風に都の空もかすむとや鶯さそふ山かぜのせ

うぐひすの声にぞ春をしるものを淡雪のまだふる里にさく

鶯の声のみひとり春を知る梢は花も咲かぬ山里

九重や宮井の庭の木の間にもかつきゝなれて鶯の声

声なくはいつ春とかしらまし春の里に鶯の声

花

かきくもり花ぞちりける峯の桜は羽風かの
みよしのゝ花の木のもとあれやまず山の端の白雲
ながめつる春の名残の花ぞかし散るも惜しき木の下
山桜や花の色香の明ぼのに木の下月にまがふ人
花さそふ嵐のうつろひにしく空に夕暮のやま

郭公

かたらはむ袖もしぼるまでほとゝぎす涙やそれなる
うちもねず待ちしかひなく郭公ほのかに月もなく
聞くもうき初音やいかにたゞ一声もなき夜の雨
橘の花ちる里の庭の面に山ほとゝぎす声かよふ
郭公なくや五月の雨雲に月の光も

五月雨

さみだれは空もしほれと焼かでも煙絶えにし海人
五月雨はふる里も道たえて庭の小笹も流れ行く末
さみだれは晴れぬ雲のかさなりて軒の雫も絶えぬ頃
絶えず見し月に契りし夜もなし軒こす浪の五月雨の空
さみだれは空のけしきも暮れはてゝ月の光もなくて軒の玉水

月

秋風に嵐の月をもとめて光を袖のしる（軒の玉水）
うす雲は空に晴れて山の端よりもいづる月かな
澄みのぼる空の月影清く岩もる水に宿る月影
山高み花の道に迷ひつゝ暮れて宿かる月もなし
たのむ秋さしてこよひいくよの月をかなしむ

草花

萩か花やまこそ風のかはおもてしつこゝろなくちるかとそみる
風さそふつゆの命のたのみにはをのか花のやとりにもなし
志ら露のこほれてそおもふ秋のゝにさかりの花をたれかみぬらん
さかりなる花のいろにそなれてこそ秋の千くさもおもひしらるれ
とをくまて野への原の秋はきし小萩か原にむしそなくなる

紅葉

立田姫いくたの山もそめにけり雲のかけさへ色にあらはれ
志ら露のかゝる山路のもみちはゝ夕日よりもなほそ色こき
秋風の立田の山のもみちはを錦に月のかけもうつして
山人の木々のこすゑをそめかへて錦をひろくもみちしにけり
からにしきいろのちくさにおしなへて紅葉にきえぬ露のやとりか

雪

峯にふる雪のつもりて冬の夜は風にさそはれ雪そふりける
山里の雪のふるえのまなく時つもりてさえし雪のふるさと
たえまなくふりつもりつゝ雪のうちにたつる煙もさひしかりけり
まちなれしこゝろも雪にうもれてそたつねくる人のあともたえぬる
たえぬへきこの山のいほりの雪そなをあはれに春のまたれぬるかな

歳暮

春をまつ花のたよりもあらしふく山の奥にもはるやきぬらん
山川のはやくもすくる年なみのあすはとおもへはかなしかりけり
あらたまの年もくれなはあすよりは春の色にやなりかはるらん
入あひのかねにおとろく年のくれ小蔵の山のけふのゆふくれ
入日さすとしのくれこそ物うけれ雪のふる里たれかとふらん

初恋

山端よかり入るゝ葉る月それしたて雲霧をしち音はとゆかり
是ハ此山の志つくれけてたゝおもふゆ紛ゆらちぬくつか
初時雨ふる山人の下紅葉のこゝろもかはりぬる
始ゝさえよ言ふえてとむかるゆつゝ人をまし よそとまよ
難波人はのよわり火たきこもめて、うらみよくも恋しらむ

忍恋

志のふるに猶色や見えむやかくちるも乱れてはちるはく乱とせ
今こハしよ此てふ見るし見るゝ我人の事も人かう
いふ人の我思ひの中にも入てみ忍ふや袖志ほりまし
思ひ忍ふ庭の小萩ハ我ゆゑになかるかゝ袖にほの見えん
嘆きつゝ忍ふにたへぬ我身かなし打ちハえて煙を立むとはになりなよ

初遇恋

逢ふ夜をかけりの桜ハまつ見えの露をも枕しける夜もかりさて
夜の時雨手枕の袖の露まめしてよとにそてそれなかき
さ夜ふけて今宵人待ちえぬ人からそさても月のさまたけ
消えて我待の夜半のかけにて見え今宵見えつゝや袖のつゆ
待れつゝ神りやかうて人のみかほのかゝりてこそかゝるまよ

後朝恋

まてしはし起き出て出て待ちのみ後にさへも辛きのみ
なれのこゝろすてしのこゝ雲の立別れゆき清きよし
やすらひて空にもきえよ袖のみる月のみえぬ空
立ちかへるのちも嘆のよ暮そ忍ひの月をあまる
いつまたと逢ふ海にしほれて奥まつる袖をぬらしつる

遇不逢恋

入いまそしるこゝろのなかにありし夜のなさけやかさねかさねん

かさねてやむすふ床のさむしろに待あかしつる月をうらみむ

むかしにはかはる契のあたなれや今は逢ことかたき人の名

なへての人にかはらぬ空の夕くれもなみたをそゆる袖の色かな

入うつろふは心の花にまかせつゝ人もうらみす秋風そ吹く

祝

君か代は海のひろきめくみのふかきよりしつけき御代のしるしなるらん

たのしみの世のはしめのかはらぬはたゝ君か代のまもりなるらん

あまの原あふくみかさの山のはの千代のかけこそのとけかりけれ

すゑとほくゆくすゑ千代の春秋にかはらぬ色のまつのことのは

松をそよはひの鶴のちとせまてたかへぬ御代のしるしなりけり 宗円

旅

わかれこしあとのうらみの日数へて旅の空にもかゝる月かな

たひねするよしある浦に立ちとまりなれぬ旅寝の夢もむすはす

浦によるなみのしらねの塩風のあれて日をふるやとのかりねに

ゆくゑしる人もなき山路をへてまたこえゆかん月のかけかな

まちわひて旅のやとりに鳴鳥の声ききて旅のそらをしそ思ふ

述懐

入世の中はいかにすへきとなけくにもなみたのつゆの袖にかゝらん

さもあらはあれことなる世にありし昔のことを思ひ出つゝ

うつりゆく世のありさまをみるにつけてもわかれにし人

夢の世にいかに思ひのなくさまむはかなき身をもたのむ心を

いかにしてかくてもすへき身なりともたのむ心の末をたのまん めか

神祇

きて引屋と世ゝ流てらし神垣の春日のかけに邪

にしき世をわたしてや岩清水のなかれのすゑとおもへは

桜さく山のはしめにすめる心のおくを神まもる

春日山みやこのみなみしかそ思ふ北のふちなみ春にあへとは

もしほ草かきくすさこと末葉の浦よ寄さはよ結ふ神の

一 檀波羅蜜

檀波羅蜜

うらむなよ花と月とにをしみわたしし情あて結をかへりみよても

尸羅波羅蜜

おほ法をまもりたりてうへ見れは身安てなれともを

羼提波羅

毘利耶波羅蜜

あさ夜にも三世の仏にはなれてや山川さへこ川

禅波羅蜜

心をし心の底にをさめては雲のいつこにもゆくの上る船

南海漁父百首　式部史生秋篠月清集ニ有ト

春

四方の海をそらに霞の網なれはくもゐにかゝる春のなみかな

春日野の若葉は神にたむけつゝ君かはるの宮ゐかへりて

新勅撰

かすみたつや春のきて流れ村とけく霞にたえぬ志賀の山かせ

難波津にさくや昔の梅の花いまも春の風にうつる

春の夜の花ともいはし霞よりこほれてにほふ鶯のこゑ

春風に柳や岩ねをこゆる緑にかゝる池のおもしろ
御はこむ事の心もおくられ春たちそむる浦のうちかすみて
春のかすみかゝる月夜かな雲は八重のおきても白山
いまはとて山さへ鳴の波のまに花のうへの那
初瀬山尾上の鐘の聲にさくら花ちりしむよこ雲のかゝる
又しら人花よそてきるなこの木のまの月に風かへるなり
西行は紅葉の梅たつる川ありて花も錦なりけり
みよや吉野の瀧のをのすきもみちは雲みゆるそ
みるまに花も霞もなかりきり春の山の尾のまつりを
春やまもや夜こそちりし風をつける花一とをもける

夏

山の端の霞の波ふかれくる一よの風よむかふなり
夏のうちもやみぢしおやすらい櫻の香のかねてより風ぞかをる色
卯花は雪の月かとおもひみる聲もそのまゝ郭公なくる
夏かへり秋のたつくよ郭公見ておやめのよすがる夏のよの月
花あやめさへしさきとや郭公ほかにわかしよりきてをくる
たゆみの庭のさゆりたえぬのかゝるひとへ夏のゆふ暮
せきゆきかゝる山陰のたえますみるまにたとらるゝ夕立の風
松川の岸の涼しき夏よりは我が庭のあれのあをゝむ
待つゝ志られめ秋かれや夕涼しき日暮しの聲
夏の暮や秋のこれより風よ志らすの衣の世小野のしの原

秋

袖よける萩の上葉の露なみ涼みをかへすかねにまうくと
露かけむもすきとゆく秋はくをもかへしすゝたのむ秋の野の花

秋のゝやいま一さかりなるらむ女郎花の深くにほふらむ
咲そめし花はゝ木さ花月なかつら露のあさき郁
か山より鹿の音をさそふ秋風にまさりておつる萩の下つゆ
露やさむき夜はのあらしにこゝろして出れはとつれもする
ちるらむとこゝろよするあれて吹風のかなしの衣よ秋風そふく
入 木の葉散る山のわけしいさゝかの行かたもしらぬまゝの夕暮
さひしさは今も故郷[illegible]月やいさよふやまのはの[illegible]
[illegible]月はなかなか[illegible]草の[illegible]
深きの浦のゆふかせもなく[illegible]すかたも[illegible]
いまさら秋にしたかふ[illegible]つれなき松[illegible]
こゝろの花は雲にもまかひ[illegible]かつく[illegible]
まれにはたえぬ月[illegible]のまにまに[illegible]

深き夜のうす霧はれてやいとゝむなしき秋の名残を

冬

月やとす露のうへにも秋暮てたゝしも枯野[illegible]
いつまてか[illegible]ふかく[illegible]嵐をそ[illegible]
[illegible]月かけさえて[illegible]松風
入 流れての[illegible]のこるをみるも[illegible]都
こゝろなき[illegible]
入 [illegible]
[illegible]
山人の袖にはあれ[illegible]
[illegible]月の[illegible]
[illegible]春[illegible]

恋

たのめこはかりそめなからいつかはかりしひとをまちまさん
覚れしかれのこゝろ人にわかれあは後をまつ浦の浪のうへの花
よそなるもかくれもて見えしれはゝ逢ぬとも思ひのみ
松か谷ひさしくて年月のかさねの袖にほすなるまし芝のはしの露
宇治のたかきは常にねくらはてなく流れそてつゆの袖は
とまりも草のほとりやおもひ人は萩の葉うへに露のおきしみ
浦まちのいつくとは涙もそめ月やいつとうきかの身の果
しらぬ人をも神のみこそうつしても人にわすれし身にしらるゝ
暁の鳥もなくかすかにしられしは身をもひとこそみそかにわかれ
秋の田のかりねのそてにとまる露よ露やひかりのうつす
たつねても海山とたえはてのもしみえて忘れしも我身世の中

さかりすきしやとふむしそ思ふ名をもかへて身の名ゆくにくりつく
よそにしもまことなるものしらはしや滝のいくたひそへて身やいつくはりし
つれなき人の袖にしほらしもの恋しもしきりに心もやまて
恋しさよ世にもかくてはかなき人のしるをいのちとや言の葉

羇旅

いりのうなゆくてしかすて我さてぬれ衣に小部の山のあさの羽衣
すゝ原や旅人ぬきのゆかて姥ヶ峰に枕一よのみちとそかりつゝる
宮つこの山をもゆく道はきこえてや花のこゝろも白雲
まよふ旅寝の山につゝきや袖ぬれて雲の跡にゆたちて
たゆとて旅の道のさきなかれみふかさのしりくいの袖たてつる
又人の山へひなくる時鳥の声さすらひ夜ふかきうちに
ふすゆれのこの夜やかくさん月を見ておもひゆくのの山の秋

ゐなかれともわれやかへりみむ[illegible]

清見かた[illegible]秋の夜は月もわすれし[illegible]

[illegible]やいつくに人とゝまる[illegible]

家

こゝろ[illegible]山の宿[illegible]

[illegible]山[illegible]人[illegible]

山[illegible]

[illegible]の月

入 [illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

人[illegible]みつ[illegible]山[illegible]

入 山里は[illegible]

[illegible]

述懐

[illegible]世に[illegible]

[illegible]の月

[illegible]世[illegible]

入新勅 [illegible]花の[illegible]

[illegible]

[illegible]

入 [illegible]心の[illegible]

人の世[illegible]

[illegible]

山寺の暁くらき鐘の音にあかつきかねてさむき嵐に　たゝしら雨

月の色も恋しき都をおもひやれはくもゐの信をしきを待人

心地よりまた世の外の宮なれとさらにまたてらすへき神の光を

さりとも心しつかに御世をまもる月日清みなかれし其

みなみのさとのこかれまきの木の葉をなかすせきもなし

和歌の浦の浪もつもりかなしき物まてしらすへきと　返し

為洞院摂家百首

春

冬の霞みからまされる明りのよはに待つの花まつ外

誰ふとそ春の氷にとくる山まのもとのもとは浪とゝろく

たえまやかれものせやきぬる人の雪によるとこそ春の　山さと

若はまのわかなに水まさる神のひらに山すそやふる

霞めとも日影の山さとの雪まのあらはれて春の空

花見れは春の秋の京の花ともにきえて春ふかき年の　秋の色

かつら霞の霞にきえてかぬ人の心こそのこる春の月のかの

後京極

見るこそのみそらにも雲と見えし夕暮に春の月の霞をのこる

若川のあはれなる柳の色にたれもとめむあはせの白浪

むかし見し春のあるらむ雲のかへりの夢をなかそにたつのゝ山

おもひにも恋の夜ふかに心のなかなか夜もすから神さひの秋

山のはの花のかけにつるはしに雪のあさなる庭の桜

こよひまたいそきの霞つれてや思ひはつかしき花のやまと人

花咲ける山の花散れはあはれまさる庭のいろ

ありとしは空にかけてはなかれまさる庭の嵐

かのへの舟も命を舟にかすみゆく鳴なり

ゆかしき我家の御衣をゑらみてまうけの真をへつかうまつる人
くやしくも月や花にはあはれをきるやうに日のまへの雨の月
いとかひかひしくよそほひの雪の野沢の末も名に聞え也之
分かれまくは山のさくらもちらぬさきにかり白々

夏

花の色の衣を脱かへてなつころもたちかへしを更衣と成し
卯花の雪にまかふとも月影の残りし垣ねを玉川の里と
横雲の花の垣ねにかくれ蔭は此枝もうらやましくも昔を忍ひ
なかなかに山をかへり一声の名残の有明の山の杉を
すゝしや篠の葉の露はみな宿のしるし郭公
山里の卯花の白妙も月の影まさりてしはしもの山川の
水の雨の名残のさゝなみも秋かとおもふや沢の水涼しく結ひ
六月の空の雲のたえまに夕立の風かよふ清水に涼しき

はかなくの此世もりやまていさ川まで二ゆくとも夕暮
夕立の名残の雲のひまより風に乙女の袖さゆる也まくこそ
うすきとも思ひし中や蛍の光ゆゑにかかり火のみえて待つ
秋来ぬと目にはさやかに見えねとも風の音にそ驚かれぬる
荻のおとの袖まで吹秋の山風に秋の夜の声は海
長き夜の寝覚に秋の野の千草にすたく虫のこゑにも哀人
待れば松の枝ことにさえて宿のまへに小萩もあはれ
入かたの月の色秋もしてうちなかめ鹿の宮山の鐘
ほのかにも見し月影のかたふく山の端に遠ふく風も
名にあふ夜の月の影にまよふ秋の露の光
名残の月のたえまにも其影の清き流れの光を
秋は稲の下葉まて色つく頃もしらるゝ紅葉の露

穐

こゑたてぬ秋の立田山下葉に露やとしめらん
七夕まつる夜は朝の別の露をかしやとおもふ
ちるはやもみぢの露のこにとおもへ秋そへも秋風
秋といへは寸清時にしみ露は出てゝ涼しき
草ばなもすゝきのすゑの荻に秋の下露
日ぐらしのなく山の端の音も出たにさす秋の下露
秋風のさきそて草むらにつゆ袖をぬらす
むら雨のはれまに秋の夕ぐれにつゆ
みやまは露もわかれに秋のほとゝきすのおもふ
あはれはなる萩にかよふ秋の庭に秋風やなく
山路やみちもてゆる音の内よ松のたえて嵐の

みちのくの奥山なりきさへやとつまさき
さくら雲の内なる山そあき月を見る嵐の
清見かた雲晴て夕風にさそはれ渡る月影
冬かれ月の空のこのはさえて
ゆく水の袖のこゑのみの露もなき秋の名に
露をみておもふ秋のあはれに
おもひの雁をかくて月に山の
文月の月の清見秋かくて山の松

冬

雪をまつ山の時雨もふる冬の夜
冬ざれのをかの荻の庭にまた月影
霜さえのかけの寒さみちも冬の門

あら京の春もわすれぬ宿まてに住なれし人しらぬ京

社頭月 末遠き神の宮ゐに秋の夜の月も光のかけそへて

秋ことにそなへるかけはめくりあふ雲のかよひ路さしてはる

てらす月の雲井の空にはれやかにさゆる月かな

霜にしも山も人も見る夜はふけてやまなみの影

よみ人の桜をうつす水のうへにさしそふ月のかけ

わたる山のはにいつる月かけのさやかなる

羈旅 ふるさとにかへるへき路のはるかなる

山人の住むなる所ゆきくれて一夜のやとり

やまちのみかけをたのむ旅人の

旅人の泊りをとふも雲の

旅人の袖のうへにもしくれて雲の

蓬生の小野の里人いとなみに炭焼煙山の端にひく

朝夕にかよひなれにし山路にもきやくもるかけの

一夜のみ旅ねてなれし山の端に雲まよふらん

みの国の暁ちかき夜の月の

雑

おほけなや世をすくふ神の恵みにもれぬ身を

玉津島ことしの秋も和歌の浦

風の音に神のこゝろをしるへにて山くらの

かへさには秋の夜の松風きゝて

山かけのこたへも月にかよふらん秋の

はるかなる雲のうへの月をみて

あはれ世の月にもなれてたれかしるらん

山の端をわかるゝ月の涼しさに人に月をなかめつゝ秋の夜の道をも
行ゑしらぬ世のうきことにたえて身やまてかなしき山かけ
なかそらに通ふ夏の夜の月の嵐の音を秋よりさきに
山の端の雲も霞もたちそひて人の名残をそみる
入 あはれ世をいとふ心のいくたひかなけくとすれとしりつゝもかな
有明の月のひかりのわかやまの松かせ秋にたつね行
人の世はいつくにすむも心のみうき世のすまゐさためかたき
さきの世の山の名残をむすひけんしつのやとり
花の下はなれかたくそ思ひけるきえてそまゝよ世をかへり
かゝるともきよく人と白雲のちきるへき世を絶す
秋のよの春のすみしみ山ちかくやおもひそかれて南
あまの原のやとりの清き月をみて澄る沢

院初度御百首 正治二年 秋月詠百首應製和歌
左大臣正二位藤原朝臣良經上

春

冬の夜のあけまに春のたちにしてかすみしわすれなき山
みよしのゝ山もかすみて白雪のふるさとは春のかすみの
春たつといふはかりにやみよしのゝ山もかすみてけさはみゆらん
春日野の草は緑になりにけり若菜つまむとたれかしめけむ
都人たちいてゝ白妙の袖もしのゝにめくりあふ
入 梅の花たか袖ふれし匂ひそと春の山かせ
ねやちかき梅の匂ひにあくかれて雪のまにまに(?)
のこりたる雪の山かけさしかへてやかてみる春
春の夜のかすみもしらぬ月影のゆくへを

はとゝ我春[illegible]よまて雨や柳[illegible]の花のみさえて袖やぬれなん

清見かた心も[illegible]なかりけりかけの月夜に霧も流れぬ

入 [illegible]いまは心の月に花[illegible]の名[illegible]柳[illegible]

柳の糸[illegible]春柳の[illegible]まつる[illegible]

春[illegible]柳[illegible]のくりもや水よりつたふ霞

続後 [illegible]て[illegible]月の[illegible]

[illegible]も[illegible]て[illegible]の花[illegible]雲とやおもひ[illegible]なん

入 泊瀬山うつろふ花に春くれてまかひし雲そ嶺にのこれる

入 明日よりは志賀の花そのまれにたに誰かはとはん春の故郷

夏

夏きぬと[illegible]はや[illegible]の山も霞のこるらん

春[illegible]も[illegible]や[illegible]山

郭公まだき鳴くなる卯の花月夜[illegible]比

[illegible]のかけや[illegible]

[illegible]の花[illegible]

五月雨[illegible]

ほとゝぎす[illegible]

[illegible]菖蒲[illegible]

[illegible]

続古 入 [illegible]の山[illegible]

[illegible]宿の[illegible]

[illegible]

小山田の[illegible]秋の[illegible]

入 秋ちかきけしきの森に鳴蝉の涙の露や下葉そむらん

新後撰

はつせ河流のしらゆふ秋かけてさやくるみか月の色

秋

同
風の音に末葉の露のみたれあひて夜はさひしさやまさりゆくらむ

七夕のあふ夜の秋のさやけさにわかれをしたふ月のかけかな

入 萩か花うつりにけりな秋の露におくるゝ雲のはれまもそなき

みたれ萩のすゑはの風のさやかにも秋を知らする夕くれの空

入 かりかねの鳴て過ぬる秋の夕くれ

小萩咲山の夕影雨晴て夕日の露に白露ぞおく

りまする野辺にも秋のしらつゆ

入 ことはりやあはれ夜やあかれぬ秋の空雲

槙の葉にしくるゝ雲のはれそめて山路の露に

山の端の月をまちつゝ

入 なかなかに見ても月のかけやしくらむ

入 さらしなや山路の夜に月さえてやとりかねたる

かくまてや月をみて月に秋風かよふ

月そ世にひとりのこりて秋の夜

三日月の明の空にかゝりて秋のいくよ

おしや惜いつれの秋に旅ねして

入 きりきりすなくや霜夜の寒さに

立田川ちるもみちはの色

入 まつしみ秋のしもよのみそらに秋の夕暮

ゆすられよ秋風のふく松の下

冬

入 ゆふくれ枕の上にはそてをさへしぬる秋のなこり

は[illegible]いつこ[illegible]のこ萩[illegible]
山かけに[illegible]露[illegible]もなき[illegible]
村時雨[illegible]名におふ月
[illegible]山もさやかに[illegible]
風[illegible]の[illegible]月[illegible]
うき世[illegible]谷のおく[illegible]月影[illegible]を
おとろく[illegible]ひとり[illegible]月[illegible]
かくしつゝ神[illegible]住なれ[illegible]宿の[illegible]
時雨[illegible]の[illegible]
末[illegible]山の松の[illegible]
誰[illegible]
[illegible]白雲[illegible]山

[illegible]
山[illegible]年月[illegible]

恋

こひわひて涙[illegible]
うき[illegible]
いせ島や塩干[illegible]
から衣[illegible]夜の[illegible]
さよ[illegible]人[illegible]
秋[illegible]
逢事[illegible]人の袖の[illegible]
あふ[illegible]
これ[illegible]

あさかきい風さえまさりけるよの月はなかくてしられはかりなく

羇旅

わすれそよ雲のかゝるを旅人の山のかけちにひかりはてなく
ゆふたつの草のまくらのかりそめの旅のかりねに露そこほるゝ
こゝろなや月のかけのあるまゝにしもおもかけは旅の中山
ひとり寝の床にもたつる草のまくら一夜の枕露けかるらん
ふきまよふ風のなかれもしら浪の比のあさひはいそくなるらん

山家

よそにのみ雲のかゝる山住てもおもひやるにはかけのまゝにて
しかのなくひとりかこつ奥山に松風の庭にはらふ
山かけに岩ほのこけの玉の緒もおとろかす谷の水の音
さびしさは山のおくまてかよひくるみね吹く嵐そ音はまさる

ゆきかへる人めはこゝにやま山かけのはし桜色音に嫌ふ声もかなしも

鳥

和田の原奥の小島の松風によする岩根に千鳥鳴波
さらぬたに夜の柳をみるさとの人はけふみやこの風そ吹
村しきの飛入りてる紅葉も鶯のさかへる山に音をなく
ゆふまくれ言のよしきゝなれはの花のかをとるかすみ立をはなき
山かさねつゝやまきの花をきみもとけしも花のうつらふ松に鶴

祝

君か代に逢ふこそうれしとも聞しこや山の雲はつきせし
くもりなき雲井のみちをはるかなる千代の月日とみる祝
ちとせふるみかきのうちの松もなを君か代みせしあまき
あひおもふ花の上の人の松とはいくよのはるをまちて人

玉鉾やみちまとはしも神代よりあとやくらきをしらん

院中三度百首

春

文台番哥合之

勝 入　をしなへてくもらぬ霞のあさみとりや尾上もなかくたちそめにけん

同　なにはかたまてうちわたせ川霞もやわたくしらん

同　うちなひく霞のそらもけさはまたよ所にもつもる雪そ〳〵

同　はるかにおもふ七日のわかなつむひとのそてもぬれぬ野はなし

勝 同　春のきしゆにねかひうちかすみゆきの梅のかをまつ

負 遠千鳥　つまこひてちとりなくなり野辺のしたもえもはしめてやほたるらん

持 入　野辺も山もかすみしくむかしはかすみけり春の露

勝 入　いつもはるくもまよひゆくかすみのまにかへるそらの夕暮

勝　夜もすからかすみもなくてすみの江の月はたなかくも秋ときけ

持 入　さしはやたつやかた山の月かけもさえはてゝ秋そこひしき

勝　山さくらにほふさかりの花そかもたかきこのさとにしら雪

同　たれてか春をしらんとおもへは山かけやなれしてつゝまて花そなき

同　霞の花をしのふに吹くらんなかもいろにみえまさるらん

持　あかてみしさくらの花をそのまゝにちりぬるはなにそしもかゝりく

入 持　さくら花うつろひゆくやまゝの山のうへにはちるらん

持　咲かへてゆくらんかりはらの花のけしきもかさの月

持　うらみてもよしやとおもふ夜半の月をわすれて

勝　ちりつもる山桜かけもいなかの春の庭

同　花のまてまつりてはいつかはかへらん桜の山の色

同　あたにちるこのはをわけてのこるにこえてゆくへしらぬこゝろのかこゝ之

麦

貞 [illegible]

時 鶯はひとり[illegible]山には[illegible]

時入為 [illegible]の[illegible]月や[illegible]山郭公[illegible]

為 [illegible]に[illegible]

為 [illegible]

同 [illegible]郭公[illegible]

同 [illegible]麦[illegible]山[illegible]

為 [illegible]やまぶきの[illegible]に鶯[illegible]

同 [illegible]の[illegible]蛙鳴夕[illegible]

貞 [illegible]

入同 後京 山姫の[illegible]のかへる[illegible]卯の花[illegible]

為 [illegible]麦の夕ぐれ

貞 [illegible]夕日[illegible]

同 萩[illegible]

同 [illegible]

秋

入同 [illegible]秋[illegible]

同 [illegible]萩の[illegible]

同 [illegible]田山[illegible]秋風[illegible]

貞 [illegible]

同 [illegible]萩[illegible]

時 [illegible]

同 [illegible]秋の月[illegible]

負
わけ入てすゝきをさかのほりし木間より落くる月よさやけし秋の山

勝
たのむ秋まつ世をわたりしをてり月に宿りさしてそ秋の山

同
秋なれはとて月をなかめてかけの人をかやうに月をこそ恋ひ

同
ひとりゐて月をなかむる浅茅生に露の籬に村雨そふる

入同
うちわたす道をとをりし山のはにかゝる秋の夕暮

同
わかこゝろつきせぬものはかへてもうきをまたる月の顔そ

同
すみわたる夜ふけすれは月をみやすくもある秋の月

負
鏡にもにたるさやけき夜の空の月は下葉にそつきにけり

持
秋をまつ秋のはつかせもいるへきにいるゝ人そ恋しき

勝入
露の置く萩のはやしきの　ふかくてもあはれなりけり秋ならはなかくての露そあはれなりき

入勝
萩のうへに花散らしくらき錦をてらしたゝきけり

負
こゝよりのへに萩の上風とおもはれぬ徒にさへ秋の別れ

冬

勝
時雨もいつしか色に染むる木の葉を

同
志のふやこの秋の葉をてにこそてはなる

負
冬枯の一村しける山さとのあれたる里の月

入勝
霜をみて又かゝる田の木の葉のつくしもなくもなく秋をかき

持
網代にもひかる月の光かる夏への水のさらに浦ゆく千鳥の声

勝
夢のうへにをのか翅をかはしてそ友をさはの志き

同
おりゐて流のさゝなみにさはりて流る月の影

入勝
船出した川中のなかの月のけふりにしてしもおくる

持
こゝろの山嵐のひとり

勝
山里をいくへか雪のつもりて

同
おもふことをみすてし雪は

勝 小舟の海やつすまゆあへの衣はに雪の紀ちる上旋る山風

持 雲とちし雪のひろや白妙の衣かけてよみかつく山

持 松ヶ崎みな川瀬瀬ぞ女みきと北山おろし雪

持 つまのめとなやくもやくのゆくみに一般きさもかき

祝

入勝 ぬれ衣はかたまりの松の緒かはまつるたゝく世南やん

同 君か代は千代のそれはさゆきとめをもしらはゆや之かん

負 冬もかの宮しかきありしかきかかひのまたすまへ

勝 かかる東の山をいく世ににかりてもきはた松をしうきき

同 人はをとさとをとしぞ今へも方くはしく見からる年の七代をたに

恋

同 在とさやまよひ子するか松の子は浦にうみよ法のなかのなれ

負 うち思ひは世の世にも昔かたれのその心はしらぬ人の松も紅葉

同 神もとをきこしる人の心も千歳の松を祈りしらぬ秋の原の流れ

入持 わかれ世をへだつ海の昔かしらぬはとおもひやれる心よりもの縁

入持 よる猶子かかけし我身の玉のかつまき山の松の猶

持 ゆきりし松の若やなに人の別れ苦しき恵みそてよやまの袖を

負 こかくれて我をうつせこれかれは夜にふうもあまる思ひくる

持 いかはし千歳のにもよるやうらにはしのふるにもなれよ

負 ふるよしも夜ぞとしれ知らす事のきこえいとそやまもの紅

入勝 ふるしつらすらのかのすゑ枕のしるしもとかき心やかすへり

同 引かれかくらうれ盛はそに消ゆ人の夜のもらぬしもえつら毛

同 おもかかえ人まうくもの色いつとしもまなへるもの月をへてうきこそあれ

入 神使へりとめてそ神のかけ風きさえかよそへの松の秋をたゆまむ

入勝　秋ともなれはいかに山端よそれしらぬこそみちの明の月

同　あけかすよ波たつ石とり川きよくもりて桜かな
新古今

雑

拾　みよしのゝ世にふる道はわすれはてなかりけりひとたひはしらぬ

同　かゝる今良ゆるしかたの岩根の千とせのきてすみたえぬ白露

入勝　わか世からよそのこゝろにまつかは松のこゝろさしいと末の秋

同　岩ねにたちかはる松やこゝろしたきてころもいつくらしき

負　春の田に心なつかしき秋わかれてみる世のいとなみも

同　秋そのゝくしもてぬれとも花や風にさわき行

入勝　月日のみすきゆくまゝにゆふくれのしらぬ身の秋

同　かくしかせよ身もわかれまゝに身のうきよをしのぶま

入拾　ふきまつこゝろ世をしらぬものをいひてこそはしめ

君にかくおもひしるさへ我ならはなをのこる世のまつ

老若歌合五十首

春

拾入勝　とくるより霞もかねて山も霧やかす桜まつまの春の初のせ

同　新作者　ゆみのはしゆきのゆきわれもしらぬやみならむ

同　名のみ春にならてやかすみたちゆきのなかの松の雪

負　かすみたつ山ちかきいつしか梅のにほひや鶯の声

同　かつきしやからの山の雲もなよりすそに霧たちつゝ花

勝　わくらきむかし梅さきて身のほかにかくれて春のわかれ

同入　わかきらはて春雨小山田にひとしれす水ひきやかくらん

入拾勝　いつまてか雲はくれともあらきんなさくら花さくひらくらん山

入拾　風かけてあをやきのかつらはそひとしてたつかすみの山桜かな

勝 花すゝきまねくやひとのそてにけつろひくる月をつれなきをしかのなく山

鹿

入 持 ゆふまくれ萩のしたはにかよふ野のまた露の音にしかのなく也
□ 星合の空にかゝるも照る月のかけ□□□鹿のなくなり
□ ほのかにもなくや鹿のねにたつ山のかせ
□ 夕月山風にあはれをそふる峯の松かけ
□ 夜をこめて神なひ山のしかのねも
□ 嶺の□にもみちふみわけなく鹿のこゑきくときそ秋はかなしき
入 持 さをしかのこゑふけゆくに山おろしの秋風
持 かよふ夜のしかの鳴音もきこえつゝ山の端の月

（以上右頁）

□ むしの音の花にむすふ露をみつゝ秋の夕暮
勝 碪
負 秋のよはねさめにきく衣うつ音
勝 うつ音の聲もたえ□□□□□萩のした露
□ 衣うつ聲のきこゆる秋の夜は
□ さよふけてうつ聲すなり
入 勝 露ふかき秋のよすからうつ衣
持 さむしろに衣かたしきこよひもや
持 月影にうつ衣手のさむけきに
入 持 たえまなくうつ音ときけは秋の夜の
□ 菊もまたあさちかすゑの秋風に

冬

秋はなほ今すてにみしきれもあはれさ松は時雨するかな

好みちの葛はもろく色もかれてうらむらむ霜の下の湖

嵐吹く梢はみなかれぬとも松はさらにすむ冬の夜

みなれつゝやとしくれぬ岩間の水の清流はゆきかへりし流れ

賤の手も氷りおちてにほれるやるかた見なをもひとり時雨之

木のはちる神無月の神に風さそふ初雪木の葉に散しくも

わきつくや高ねの山にいつる月のかけ見えくる浦のさす

山人のおきてさひしきのきの峰のうへに雪のうつもれ

冬枯の草におく白露も夜な夜なへぬれかわき

ふりしく山路のゆきに跡なきを雪ふかみもちるき

雑

ひとりゐてすてられし人の世の中のためしをきく

もろともにみそきしてすめるなりの流

民のためにこゝろをくたき山のすゑにしめのもの世に

この関のとなりてすむ道ある世にわたる道

かくる世に住なれてはかなきものゝ末の袖にますらむ

よの中はかなきものにはかなきすさひにやすくもあらし

青やかなる宮はいふかひもなきはまなり

いくとせか花と月とみなれてゝ心のかくれ人まうらん

よし野なる花のにほひも枝の風の音もまたゆく春の岸

和歌の浦の藻塩草かきあつめてよしあしをみるかな

句題五十首

初春待花

春来ぬとしらぬ雪まに花はさこそまたまちくらしつゝ見る日数は

山路霞

霞ぬる月日の人の跡もなし霞にそ消ゆるふもとの山

山花未遍

花さかぬこすゑやかこにさく山のうちちる匂ひを見せてあと

湖見梅

ほのかにも花のにほひに山にありて袖にうつれる風のまくれ

古き村花

たちいてや山のきりの一もとのおりにもしるき花の木

旅宿花

かくてしも花の都のおもかけはいまもわか身の花のちり

田家梅

あれくて門田の末にたかき梅のさくらの花に香をたつ

古寺花

のきすむ神河の山の古き花寺梅の人にや雲にしかる跡

花非雪

よしの山木のもとも春の雪消くもる夜旅人さそふかな

海辺梅

すゝの浪も花の色まてすゝやとかへる春はさくらけり

深山梅

かへりみる山もはるかにたつ雲の花もさかりのおく雲

暮山梅

み山かくれも見ることなく月を木間よりやとりかねん

古渓春

ありとみつゝきし山の岩風に花の雪さへ見しくちる庭

旅路春

わか庭のさきまつすゝむ春風にちるともしらぬ花の香流れ

霧中花

ほのみする花の梢にきられいかなる山の春はくるらん

湖上春

雲の浪煙の浪もこえやらぬ花の霞の一つにそ見る　湖三

橋下春

東路の佐野の舟橋白浪の上に我もゆく花の香そ詠

花下送月

花の陰わかれまくをしき惜む身にともしらぬへき花の影　永

庭前落花

春雨のふるとも見えぬ詠めにも庭に花そちりしきぬ

暮春惜花

さそな猶宮の神の花の香も名残をつきぬ春は暮ぬ

初秋月

秋来ぬと夕風寂に延初てたのまれぬ月のかけやよそに見る

月前萩花

入方の月のかけにいふ萩は露しりて夜の月をそとふ

雨後月

村雨の晴間にさえて秋の空暮ぬと見えぬ雲のはれ行月

松間月

松陰の末の松にさし入て梢に月をかくるきまゝ

山家月

月みんとしけりの庵にてつれなくとふや山の奥かな

月前竹風

いろ〳〵も月にみえて竹のはかくしまを秋風ぞふく

野径月

新古今
ゆくすゑは空もひとつの武蔵野に草の原より出る月かけ

沢辺月

月影は氷りもせぬを宿るらむもみぢの野沢にうつる秋の夜

月前聞雁

山のはの空は雲なく夜をさむみ来ぬる雁の月に影見ゆる

浦辺月

から衣月にはさむる衣手に立よる浦風もふけの空に

月照滝水

山人の衣なるらし白妙の月にさらせる布引の滝

松間月

嶺たかく嵐の松の月かげに神さびて木の間もてすむ秋の夜

月前稲風

稲葉そよぐひゞきならや秋風のさえて月にぞかよふ

江上月

旅人の遠き秋の舟かや入江の浪にひかる月影

月前虫

誰とかく夜もすがら鳴くきりぎりす月にさえてぞよはるなり

月前雲遠 (雁)

さえし夜の月も照らして紅葉しての雲ぞかゝる月影ふけて音ぞ聞ゆる

旅泊月

忘れさりし苗か袖ほか浪まくら夢に過る道にこそ

月前草花

露は秋の色よりうつろふきを月のやどりかねて露の

菊籬月

月のすむ小菊か里は色こそ籬にうつす白菊の花

寄秋懐旧

秋をこそ待つ時にわすれし事をかなしきよ雨の

寄雲恋

うつりゆく人の思ひもうき雲はたえてつれなき恋かな

寄風恋

結ふ風のつてにしられぬ松は常に音をしきれ

寄硯恋

忘れてはうらみしをれの袖にいたく少しをきの玉水

寄草恋

やすらひかたの末かし結ひとむれをかはりぬる心はみえつる梅

寄木恋

かくの梅の恋をなき人にかれし言はまちときかなしも

寄石恋

なつきこえ末かりて心をみせぬ恋にふみかれにもらす花

寄嵐恋

嵐して深山木の末しく吹嵐かてしはかなき浮のよのも

寄井恋

涙かき出しかはのせきを行末かれなへしもせよ思はしき

寄羈旅恋

恋侘て旅にかよふ須磨の浦にやまとの夢をさそひきて

寄衣恋

後京極

衣恋しやまとに染しわかちなん人の紀をあはれむ深き

家百首歌合　勝五十五首　負十五首　持三十首

千五百番歌合　勝五十首　負二十八首　持二十二首

老若歌合　勝二十五首　負五首　持十首

已上

勝百四十首

負四十八首

持六十首

式部史生秋篠月清集 三下

春部

春たつ日雪のふりけれは

吉野山かすみて白雪の古里とやいふ人春はきにけり

はるゝそらしぬめり

まつくるゆきのみ雪をまれ袖てふらし　春さきものかすみをも

霞なる山のあたりそこふねと春やそ吉野雪の下草

これの谷の杉村霜きえて霞とたつ峰春の山

千里まてもかすみのとらまなさとし白山

鶯

雪は花もまかいね山里よいもとら春うくひすを

残雪

入 勝
おほ坂の杉の木かけにやとりて関路にとまる去年の志ら雪

春の宵のみかける中に

勝
春やとき朝日の桜に雪さえて今朝まて花の枝にかゝる

院の十首哥合若草

勝
はる風の吹ふけ日より見わたせは雪ふる野への草そ色まさるみとり

同歌合に落花を

入 持
ゆくさくら散ぬる花に風ふきて月まてにほふ晴ぬ春の宵

院撰哥合十首同詠海春樹

持
みなと江の沖津浪さの浜のなきくれ見せゆき雲かすみけれ

同哥合月霞中花

勝
まちかねし桜に霞そめて夜もすからかれゆく春のやまさくら

同御會に松間鶯

雪折れの松を春風吹かよりにはなれてつると鶯の声

同御会に朝若菜

都人まつはのゝわかなそも野に初若菜つむとそつむ

同御会三首春風不分

勝
なしみえて民の草木もおなしきみか代に吹はる風そふく

日
梅花薫暁袖

新玉の袖の香のこととに残る朝の月と梅の香そする

晩霞隔春山

日
かさねゆく霞の袖も一重ならふやとうすき山のはのかけ

建仁三年春上皇太内の花の陰に

ちりかゝる花をのみ見のかけに入て詠むる

御製

やよひ山も夜ぞさくらとうつる花にまよふとも雲とも見よ

帰雁

入
ちりそめぬ人のこゝろや許さん何をかりさよの花の白雲

大原にまかりて花見侍りけるに日暮に[illegible]

花にあかぬ心もはるの日のたけも心もたゆるのどけさ

家の会に暁花を

勝
岩戸あけし神代もかくやしらむらん霧はれてゆくあまのかく山

池辺桜花

春の池のみぎはの桜のさきしより紅くゆきて波ぞ立

[illegible]花

おか
何さ風に花ちる里の[illegible]花とみえける山

山花

新拾遺
花の木の[illegible]の花の白雲

春の会とて

[illegible]つかれ[illegible]春の[illegible]

新千
峯の花の[illegible]月[illegible]春風ぞふく

入 新千
雲[illegible]山の暁の空

入
[illegible]春の桜に[illegible]

帰雁

入 新勅
かへるさは[illegible]雁の[illegible]

春の部より雲の中に

[illegible]鶯の[illegible]

里とほき秋の月よりこ[illegible]山の花の人[illegible]

何の[illegible]山桜[illegible]海士人

ゆるき消て花さへそめる高円の尾上の宮のたえし時

治承山春

君か世の山花よりこそ世やおさまらん慶賀するはるの末かけ

関東の西園寺に侍ける比大宮院座主無動寺

ありける時つかはしける

都にははやうつろひの花盛さかりなるやこの山はまたしら雲

返し

さくら花なにか都の花ならて頼もしき宮のめくみ山とは

おなしく比叡山より

なとてかく木の下かけはたのむらん山の春の末をたのむと

返し

春の山かくてやつきむ花さかりの世の行末はまたしらぬ

花さかりに太閤に於て申しかはし申けるに

公卿の徒ありける女房の中よ

風の音いつとはそれ日数へて花やきぬ此雪とかなる

返し　女房よりつかはして

ちるを惜は君に待たる花なれはちるまて日数をかるる

おなしく比叡山の花を折て人の許につかはしける

又人のよもすからの花の梢にほのかなる

前斎院大炊御門におはしましける比女房の

中よりの人に桜を付て

古への春をこられぬ人桜これやたかしのせとよ

返し

八重桜折りつる人のなからましかはこの春をいかて

宇治平等院にて一切経会の後舞の会
あり
清の水ハ宇治川にせきとめて花のりし舞楽結構
柳かし日南庭舎に伝花菊容といふ舞を
まことの花のちるにまかれて風ふりれんぽうの舞ふ
又ハ中宮の女房たちみなのりて公卿殿上人
みなと桃の様かうして何をかひきあそびけるそに
てふかりく舟中見花といふことをかきまするに
棣棠枝く雨ふりハ花にかりそて波によるとそふ山吹の
音せの女房の声のとよむ音せの声とまぜ
て被済せしぬてふかきの声とよみけるにに
春のくれ

何さかよ此花紛る漢水花と月とも此明かさ此山
花の前にみせる井あり
桜さくひろ此山の此時まして花によりゆく末の浪
それくの花さかりまかるね白き風よ何をかいで桜がり
大山路やちりか来花でふまりとそ松の下ゆく岩の苔
茂ききぶ桜の風の時にあせてふりき浪かれてまわる池
喚子鳥と金利蒲流り
咲きも何れ家にてあまりも合ふものふかくは世の声
春のくれかな
山里の人も情に春くれて苗葉の末に花うつりぬ
古巣うつむされゆくしとや何れの下道もうくる
三月尽

入相ころまて入ぬるのゝ山に猟士ハ猶そふまりて哀也ての山

夏部

更衣

きのふ作りみなれし衣をぬきかへて今日よりの袖

花の袂の名残をもかなしみ山時鳥鳴なるこゑ

夏の歌よみける中に

竹里の花をのこし植たるさかりの松の下芝

卯花

色のよしかたらひ錦まとひの袖をうつしたる月よりあかす

葛篭卯花

おなしくは月かけにみえまし卯花山の夕暮の空

暁更寄橘

橘のかをりさそふ風にしのはれて昔の夜半の月

盧橘

風かほる軒の橘とはかりて古のふしみの里に袖そかほれる

浅の檜葉の草中寄後郭公

五月雨といふとしはしの時鳥人もしのはれて月にさそふ

松下晩涼

樹のもとに夕風かよひて秋とやおもふ庭の松風

院にて人々歌よみ侍りしに海辺夏月

夏の夜の明石の浦の浪のまに月の影そみえて秋の夜の風

同院会次歯前に竹風夜涼

くれ竹の葉すゑに風のそよきてそ秋とおもふ夜はありける

山家五月雨

新ちりぬ松の梢にみるさへのいさりの海にうす月ぞ残る

院十首歌合に菖蒲

負

あやめふくいほの袖も枕もかやぶきのなをそれもまたふかき契を

郭公

勝

さつき山新木ふかきにほととぎす橘ならばこゑやくらへし

院の蓮華寺御会に雨中郭公

さみだれの羽田の雨にまでたえて聞きもききつるほととぎす

野亭水涼

野中なる松の木陰にせきいれてむすぶ清水の夜ぞ涼しき

家の歌合に暮時鳥

勝

なくこゑも友まちやせぬ山の花の夕くれの声

郭公

あふひ色はうつろふかげにおもふ花の宿にまちわびし

岩井の山かげにほととぎす来鳴きつるかな

まつ人の袖にかほりて時鳥なく橘の夜はの宿

まちでなき郭公の声のとききもなくに鳴くや我宿

海上郭公

雨はれぬよそのしるべの郭公波路の沖にほととぎす鳴く

又首の題の中に夏のこころを

勝

又くちなしのいかなる郭公いかにさつきの雨の夕ぐれ

早苗

又早苗とるにはさみだれのあとにくれやすそのみちしるべ

古池菖蒲

うき草のかげに人めもひかぬあやめそ池の面に見えける

菖蒲を

かくれぬにおふりあやめもいはやかましいつとむらて打やさそかん

みちのり中家太夫の許よりいやあやめるかき

根を送り侍るとて

君なきふかくなそこゆふかまかやうろいやかれ袖をやとかん

中家太夫

返し

おりふらん心のそこゝ君よりもふかきいやかよわまさりけり

みちの中国の前とて

夏の夜は底へとさしこれりあもたしぬ人も通ひきて

鳥羽殿すゑ首前海なきにもかうる中より

城外納涼

山際の鳥羽田のさなへもそよきて来こも風に秋のかよふ

池上見月

池にすむ光をそ見る思ひやる木の下くらき夜の月影

家々納涼

大かたの夜なきにとしもなかりけりやとるも文は宮も清水せきけり

渓流晩涼

志りしそら川の流れもすみひつき月にやとらぬ松坂の渓

夜の間よりみえける中に

白河夜の柳の木下くらけりに夜なきなきみな風のすゞしさ

夜にあさくれもさもくや思ひかへん松山川をおちるまて秋

雨後夜月

夕立の風にやかれて行空にかくれてくのちかく山端の月

船中夏月

夏の夜はやかてかたふくみか月の枕波よるよりみしかく月そしられ

夏月

夏の夜は空のいつくにやとるとも家西涼しき月は清みけん
月影にあかて明ぬる夏の夜のみしかき一村の秋そまさりける

蚊遣火

まきのやの難波もすくるやとのうちに煙たつるやゝ蚊遣火のくゆる比

蛍

風そよくすゝきの葉末に涼しくもゆる蛍哉
窓近き竹の葉そよく夜半の風にあかぬ日の光のかけもみえける
音にきてこそねはかりそ蛍こそ秋にもしるき色はみせけれ

蛍火秋近

行蛍さても涼しやほりの水に雁鳴そ風のすゝしき

延応三年六月十六日
流れ来て乾候手草の秋近
晴
夏衣すゝしき風の秋もちかき葉の末のまつの色そや秋を待らん

水辺夏月

夕立の雨の名残の夜はまさる月の光の白波

雨後聞蝉

村雨の露もまたひぬね覚の蝉のこゑもいまた涼しさは

乾燥の夜は夏の月は岡庭

大空は雲も風もたえて木の葉もそよかぬ夏の月
はれはれし白雪そこに見えてひとりや月の光にすむらん

秋部

立秋

下草に露も見えて秋のくる音も風暮に白く

東雲の山の端とはいへと朝日の出るらん秋ハ立ぬる

初遇立秋

松陰や夜の名残も清き水秋風ハ身にしみにける

秋のたゝしかへり

衛士の焚く秋風すらぬこれそけふなりけるきけしきの空の古へ

なかのれの露よりいくらの波の音も有とありや秋の松風

窓の下に庭のりとてや秋にこし葉の庵まりのすむ

色の露の袖よりちりやまん荻の秋風本越まくは

精く風のゆきに秋はありきもの色に及ぶ荻の林葉

院の撰哥合十首の内　山家秋月

勝
入 山しもは[illegible]人ハいとも猿く[illegible]の月よ秋風ぞ吹く

湖上暁月

持
志賀の浦さゞ波よする霧のうちにかゝるくもる真の水

院八月十五夜撰哥合十首　名月多秋

勝浅
月ならで誰[illegible]む君か代に秋の名と宵の[illegible]く迎ふとも

月前松風

持
秋の夜のなえも[illegible]そことりそ月のかつらに松風ぞ吹く

月下擣衣

勝
入 里はあれて月やあらぬとうらみても誰浅茅生に衣擣つらん

海邊秋月

負
立波の煙なたてそ波まの海士の塩焼袖に月ぞ宿れる

湖上見月

貞 あふ坂の山越えてゆく湖ハなかの照月ハ千里なりとも

古寺残月

貞 鐘の音に油煙のけふり残りさてくる手向よる(?)の月

深山暁月

拾 入 嫗かゝしぬかゝ山の端の孤笑へたなさるれ木の間の月ハさしき

野月露深

晴 秋の野ハたつ露さくすすき露ハもとむる月もぬれぬれ

田家見月

晴 秋の雲しくとみれといれせしろ伏見の里ハ月のさひしさ

河月似氷

日 是も又神代ハ志て立田川月も影に氷くるとハ

同夜更行に月前雁

日 入 一声も雲の衣笠いとゝ月のゐやのよすゝめの月

院にて十首当座 月

日 月影や浪さむくいぬものゝさむき浦にそよする人

山嵐

貞 うち志くれよりの木葉ハみな付みしむ山嵐秋そ暮ぬかな

院にて和哥所始浪殿供の当座

初秋暁露

拾 秋たちぬいく日もはつぬ萩原や暁露の袖よそめぬる

寄路秋風

日 入 人をまつ不破の関屋の板ひさしあまりに浪ハたつ秋の風

旅月寄宿

勝　足引の山かつらきの月もさしのほる松の枕にちるはきのしたよみ

草虫

持　なくむしの声の秋萩ちれはさていかに人をまつの葉の影

院にて新院御会に江月と云題

持　秋をうきいりえにかれし蘆の葉の月に立そふ霧のまよひて

秋風微雨

負　またしくれも木の下風秋をしらぬはやこそ尋ねつくしもすへき

同夜南苑御会 山家擣衣

すむ人もなき山かけの衣うつ音しらぬいつくの枕

同新院月前秋風

行月と松とまつはしるわたし時ての宿を送るまて

水路秋月

冬の夜天川よそにかたるわたしてもちるや送る風かけ

関路暁月

いつよりも一夜の実こきはる浪の音

院にて八月十五夜於南殿御会 秋月五首

嵐吹もしられぬ夕霧にかかる月をみる花としてし

きのふすきぬる秋もしらぬ夜の月によるは

のちえんともいかにも秋のたけぬ秋の夜の月

露のしたへも月を庭とかかる秋の夜の月のひかり

きみかまて秋のかさねも秋はたてとすみ　勝

八幡若宮歌合 院にて…六首

同秋風

入　勝　やまと山秋風は秋のけしき川波…

雁經月

持
入そ近れかきつてもさつらぬ雁への月ゆかしくそてや家にたつらん

旅宿月

負
大和路の衣はしきたへの旅寝にはとしころやゆるさし

海邊月

持
白雲にゆくゑさためぬ浪のうへに月なからや浦風よ

守浦河邊月院御會に山風

持
末とほく網のかゝる松の風もこほる浪の利

氷月

勝
おもひたえいとはれ月の影の橋のよみわたれ

暁露

持
都をはたちいてゝかりのたひね草のはすゑしもの

八月十五夜於近衛殿初度之御會に

松間月

勝
いつよりも八重に千ふる松がえにすみぬる月をしらすもやまや

暁更月

持
このはをかりにちきれにありけるの月のかけのうとき

田家秋月

持
いなのそにいくはたもみつや月さとまもろき

霧隔月

負
都にて八月の雲井よりてもかなるの山の光のこゑ

名所月

勝
しほ風ふきてかきたつ秋八月さえの浦や今宵の月は須磨の浦波

八月十五夜翫月同亭御會

貞
いつも秋さはまや中それに五めくる月よ猶此夜の清さの一類

家横亭合よ山月

日
見る人の山よりいつる月の光の幾世かけてかすむら利

野風

神代より吹きしをやはらきて今すむ心の風を聴秋を

秋の夕アよ

あはれとおもひもしらぬまゝにしむまてきこえし此秋の夕暮

秋にふれてそめて後もしなひ霧も時雨も人の心やうつろふ

秋といへは夕暮こそ人の心の袖とも見えて物思ひの秋

神代よりふる露をそてぬ世をいとひて秋をしれ

見すてゝ月の人の心まて風にこゝろうつれのみ

花猶

露の人のふしもみる宮の月はかはらぬ世をしのふれは萩の上を

秋をまつ萩の露すすき寄しく夕アの暮のすゝき拾し宮に結て

秋くれはおもひふるる萩の嵐にうつろふなる秋

すかたにも見えて萩の花のこゝろを露のはかなき

露の袖のさむしろにいつのまにか萩の枝

雑亭

御庭の秋の雲まてすむや月かけのみや夕暮の色

春秋はいつれのことに又は此うつりの色を

露の吹きかよふ人の清さは露の花をしこゝろ

庭さりの籬の枝への花を尾花の下よりすゝし

村雨をかけてよるの月の萩の下露

草むらの人はいとはゝみもとめもかりひとよくさき花盛りも

野守なかれそ花のにほひすゝきの露の床のおもかけ

うちなひく入江のあしのみをつくし夕浪よするかせになみける

庭草露滋

むくらはふやとにはみまくほしき露の床まよなかれ

虫声非一

さ夜ふけて浅茅か末の露の音もしけき虫の声そ聞ゆる

田家稲

風わたる門田の稲葉そよくなりおとろかしてや秋の山田

風破旅夢

みか夢を深山おろしにさめてみれは月は旅ねの夢よりもあはぬ

萩

女郎花

をみなへし庭の小萩の花の露を見ても心ありやなしやとたれか

風吹は野にもあらねと女郎花なひくすかたや秋の世の花

蘭

秋の野を花の香にとめて人こそしらねふるさとの

むかし人の袖のかとそかほるなる藤袴

初雁

秋風のふくにつけてもなきわたる初雁かねを聞くそかなしき

つれなき雲の上にかへるさの萩の上葉も露そこほるゝ

秋風

清見かた森の木の間のかせすゝし

うちなひく浅茅かしたの風そ吹く山川の音

右の四季よりはてしてみえるに又夢想の歌
又夢想し本れて百ゆきて神に入歟秋の紅葉なる

次に実月

すゝきの実深ける人あれ枕にかへる月を消つくしかく

月前草花

よ露の夜をも紫の露数入さへ月ふる宿る庭の萩から

月照荒行

見ゆれとも何だしつゝ夜の影るれて見える月の夕明けす

林中暁月

よそのそよ空の木間ふけれ入神にさしける月の月

連夜見月

くりもえらしたひぬむ夢路をさへふれくよの宿よ月をさへらん

詠月五首

未出月

宿をうしなへ山こと庭の長月の月待ちぬる神の白露

初昇月

山遠のあまをそみちぬらん無影秋の夜の月

待午月

秋の月も源ゆにゆしかぬ方を立かりしいやく子月の出来

漸傾月

立ちくかりし山る以てまさ少へとめぐる神ぬよの月の影よ借そ

入後月

夏ぬりてふりて大石ののこ露を夜の月ぞまて又暁の山

山月

山ちかき都はこの比なまそにかんて詠むらむかし文殊の宣

山居月

山ちかく世を厭かくれ家や住ぬらんさらぬは月も夜にかくれ

八月十五夜夜もすからの詠なり

今宵かく心のまゝに詠めし秋は山端よたてしことなく

たくひなき今宵の空もそらにまちし今宵の月を光にしみ

恋し

情そめて文とるひとめのしもまてもみわひしまつ此山の端の月

君かしらんそれ面影と思ひしそ袖なみだ涙に宿の月

月ゝ夜かまさる夜かなしかりして

そでのかへ宿かす露のたゆへもすまち時雨もしたかふ秋の夜の月

かわりな我かしもあやな秋の月やうつりてや神のかたよすらん

まち月よいくよふしへみ神の宿やまつてかけて宿るまつらん

君やはしめ今やはつきて秋の月いく夜すみてか神やとすらん

まつしかして秋やはかゝる月影よなかめぬ宿の人をしのぶる

みる月は山より山にうつりきぬ袖ぬれて晩の空

いなりうるさく宿かる

老ひおてしられて月は秋すぐは袖にとまりて月や住らん

月并にみてきさ年よ

春を見はてふさ秋は見しく雲のまよひなしの月

わか宿は春の日よみ月なら雲まの月の庭のまちかね

うれしく秋の心の果は分れても月ゝや秋のなかの月

いろ紅の池の水草ふかくして行かぬ路の月らを

まよふみし山井のかにすめる月わかれてまつはしきのめの月

ゑまのまつりらしも吉ほみゆしかはあきくしらまく秋とはなりまて

一二三四句目に上よする也て秋の字をよみける

一句目には秋の吉のすゝきも見えおほせて二行目すみすゝろ秋の夕暮

二句目には桜の木末をはへ神の時雨もみかの川の人よりもかゝしよりす

三句目の木の川の声をよそへまつて吉野のまてや秋のゆふく

四の海の吉つかた秋流のしらくもりのよ見の月はえ人もしれ

五の山さりしよりみ見てしのゝかたの秋は見えもよはしきつれぬへん

六月の声よいとひし月つきに秋は海人秋かたちをやれへん

七夕の秋をもちまゝてよきにあまの河のみなへきいろのさもしさい

八まさに官路は、よその門は夕暮のうすゝてさつの秋の山まで

九まやはまし声をしりゆるみ小吉ありて夜庭の神霜

十のかのとうくなしゝ枯けきわうきかなれこやうれへかまゝ

秋夜

咲さらぬ本末ありぬ秋の夜のかりかね見えの此かたへ今も来

くらきよの宿かりつ面には、かよふ宿は明月の松の秋をぞ知く

ゆかの寺松の嵐に秋なりくは時雨ぬひまや蒼露もなし

あはれなるを秋も一よもかさすあはれ宿をたし月ならぬ

穐平

秋そらし菜にも木すゑも露えして月よ鹿鳴る嶺の山

木の葉をもにつりの事業はかけつかてし露あたてしの秋のさびしき

あきには日をりくて菜末もたえてまつ我袖のぬらし見ゆれ

あはよのしきれ吉は時雨まて色の花の風よ月ても絶る

野分

草も木も猶くつよきてぬ夕時雨すそれ、笑の露ぞくさる

音

時しらぬ山ふところを恋すてふ富士の煙を音よりまさへく

山ふかしいひしは声をおもひしるらんも秋の夕暮

花こそこそ勧寺にて待つる人のまつりし音

思ひすむ山のおくをもたづねつゝあらしの夏の夜かな

世のうさを猿よりまなる山の奥にきく鹿の声は秋風

さを鹿の鳴沢辺の秋の秋もしらすハ秋風の音をとどろかん

あはれ世のまた見ぬ秋の秋風のかよふ浦の名古のうなおかる人

涙さそふ何かつらきに思ひのねさく草むら文字の音しらし

又

書見てぞ我思ひ泊る書ふしの月夜のうちの夏の色かな

鹿の鳴三世のうらみせらで まさる山の奥にある秋風

風吹て君まつ夜の我妹に鐘を涼しき松山の秋の音かな

初さ夜や秋の野寺かくれの涼なき森の鐘をまつ音

岩ゝ居や思ひ山里の鐘ならくハうこゝろぬるも絶えず波

九月九日紀文に待ける時中宮定頼送る

よしなくへ思ひけるを見る日ありける利て

亭院の鐘さわぐ夜を清の日ありつけし

おなし

白菊にまかひむすひしおきの霜見しとはの色をかさねて

又

白菊やむかしてやみしひとの菊ハ中々ぬりやくるの籬かり

さらく待を十三夜にをくやと待きれぬ

さりとも雁に秋の月のくもりしも中への家に結ひせしかも さしみや

同し　中納言

みる人もさらに影のさやけさのみかはすこしの月は秋もまさりけり

又

みな人の心影の露のうへにもはてもなき月や今宵の空

なしはつきて行を送とて

中宮大夫

大かたは秋もよひの月はくまもなき詞の花は今宵ぞすむ（すイ）

同し

雲の影は雨にきえて明かたの月はみかき出る（かイ）

後夜待夜

夜こそ長く秋もなかなかや月入ぬ峯は影も見えて

待夜

夜はなほ光ふかき月は人のそらの都は月よりくもりなき利

時雨のさきて

菊

大かたは長きよる村雨やさらく神有は名のみ花の香も

山川のすみ菊の花色も名も利谷の水に久しく咲にけり

紅葉

秋の田の山桜のめにも飛て時雨そめる秋の色

庭霜

朝風のふく袖に霜も庭にこほれて花をや露のたまも

蓮集子藤原君秋来は為一人長秋心

さらの月かし花をも見ての道へやぞ我世を深やきん

秋暮雨

宿とめて庭に木葉の積りより人まつとしもなし我ゆへの

月影はかなしさまさる草まくら旅衣山かりの

霧もまた秋の末かと色見えて莫まれかさむ

九月盡

声暮すは秋ぞかりぬるなごりの風よ我人の心になれ

冬部

冬のはじめよ

新後撰
なる秋の空の雲間の捨ちてさむしや冬の冬はまだ

木葉にて後におりし奥山の松に風もこまさし

白風の岩が根に河の水もかれし

板の月なく

院にて撰歌合十首歌中に風吹枯草

貞
木葉ちりて後もあらしの山おろし柏葉の末に嵐吹也

雪似白雲

拾
花の雪もさらに妬ぞと思ひしてこそそめくりての白山

院にて十首歌合中暁雪

同
夜もすがらふれる雲のうちはれて月は有明の峯の白雪

水鳥

入勝
さゆる夜にむれゐる鳥の声なれや我のともにねをやなく

院にて歌合に寒夜月

同入
紀るとも荒火の時りはてて

又歌合に山家細雪

勝
うちひきたる人のこゝろしらぬその杖の音にも下されし

家會に野径霜深

志ら雲もひとつにみえてしらむ時しも音ならむ山の端のさと

千鳥数声

まちわびの浦人いまや待ち見えしてさわぐなるいさや浜千鳥

月路鴻

むかしこの月は袖の白妙にそれも見えたる雁の声なり

遠山雪

行てみむ寒き夜ふかく見えわの山の端白き雪の明ぼの

山路湖雪

ゆく人も絶えて雪ふれば見える月や浦の山端の月

遠近千鳥

負
さらでだに夜の浦ひとつたちさわぐ千鳥鳴くなり

家にて探題十首中庭雪

ゆきの雪よりまさるかたち白く見ゆる花の雪は下こそ

道寺合十首樹落花

山里にて花や見えつゝ春の夜の月の花は

後京極
池の月

池のさゞ波風の吹くそこに見える月かげこそ

山家秋霜

おもひのほか夜中の月のかげ見えて

寒路見鶴

冷泉山寒の浦人の袖にかゝる白雪

氷鳥聲

鳥こそわれ浪よするうき巣たよりなき河辺にさそてよるなく

旅泊千鳥

かのまくらにひとつさしく夜るの友の浦の千鳥や

野中暁風

風わたる野のさと行秋をひとしほ風わたる宮の篠原

湖上冬月

志賀の浦や汀にとをくなりゆきてこほりてる月をよするさゞ浪

燈前懐旧

かゝげつゝ見るもむかしのしのぶ草やむかしおもふ小夜の寝覚のともし火

寄衆言恋

忍ぶれどつゐに知られて浪の立名のうきを身のこゝろへて

家會又河上也

まつ雨の浪や花ゆゑうち清瀧川のながれのすゑ

吉野山花月

一と春の花をたづねて吉野山花の枝より月ぞのぼる

伏見里雪

里ゆふべ宿のうちにも出てみるや伏見の里の雪のあけぼの

雲のみの花にまがひて峯の宿の庭を傳て

也し

花々

水宿は水にうきてし結びけり

宮の郷に結びつゝ

ふく風の宿の庭の花にちりて

君がすむ松の戸ほその宮郷

なし

入道釈阿

君か代にあへるはかりの道はあれと身をはたのまぬ

あまのはら...神代のみよ

田家時雨

いく秋のしくれを山田のかりほには秋とて神代時雨ふるらん

山家冬月

山かつの...秋の夜の月

十月ならひに時雨して

冬来ぬといはぬ...山風かよふ宇治の川なみ

...のむなしき...

志...秋の夜のかきもあへす...月にやとるらん

夜...庵の...にやとる月かけ

冬の歌の中に

霜...

いくたひか...神の...

...

閑居冬夜

さゆる夜のまきの板やのひとり寝に心くたけと霰ふるなり

山寺始冬

吉野川...岩波の...

湖池氷晴

ゆふかけ...の月や...

池水漸凍

道...池の...つもりやらん

網代晩雪

浪のよる心はすゑの霧わけしらまし宇治のあじろの
守

あくるまで積るかげぞ見えおいて見えつけと敷よ宿る郎
千鳥

てる月の影よりまさて小夜ふかき[illegible]浦つたふ之
千鳥

山川の流は氷よ行きしののその霧[illegible]

樵夫

花にしもも猶見ぬ雪のいつよりさかりても帰るその山人

深草里雪

埋もる草の轍もみえず枯野より[illegible]里は[illegible]しら雪

旅宿深雪

旅中が意のまくらに風さえて[illegible]

山家雪

うかりける文山路は[illegible]宿も[illegible]

雪積も[illegible]の椎は[illegible]

社頭雪

三笠山[illegible]の月は見えぬて[illegible]峯は白く雪

雪中遠望

[illegible]秋の[illegible]

[illegible]

[illegible]

也し

夜寒の庭の雪にもあれなくてこゝろむ心のかきはてゝみる

山里にくらしの跡よみ侍る

都のは時雨しくらし日はかりけ山里はゆきのあけほのゝ

冬のうた三首の中に

里てらす人まつ庭のさえまさる宿にもかゝる夜の月

たまにぬく竹のひの流にさわくともしかし神そまつらむ

さひしきは浦もかゝめの物もまたさくまの霜の小まつの細江の

山ひとつなりはてや[illegible]とも竹川のあ

歳暮会

世中は春にこゝろの浪にまよひはかなきやのめとまかへ白雪

雪しをる梢に雲はあらはれて花とちりかふ嵐の山

歳暮

わすれめや春の霞にたちしかとこゝはあきかせ白川の関

家にて歌合に冬述懐

世にふれはやすくも年のくれにけり心のうちはかつこそあれとも

院春日の御社の歌合三首内落葉

庭のおもに木の葉の錦しくときは神のまゝに

少将定家歌合に時雨

村雲の行かふ風にさそはれて夜半の月に時雨はいくめくりかな

祝神

前内大臣家屏風歌

第一帖書

小朝拝列立の心

立ならふ雲井の春はゆたかにて君か神さひつゝめくる庭にそ見ゆる

野辺小松原にて子日する所
春日野に小松引つれ行人そかつく千世のためしき〳〵
　山高み霞たなびく所に行人の松をもて
なりゆく君か里に宿る所年のあらた松の風かな
第二帖
　花待春間に常ある所人の家をあり
春日の長閑に霞も積る里村とけて〳〵ひす花鶯
　春日祭の社頭儀
いく春日神のまつりせ三笠山岩の鳥居の末そはるかな
　人の家に野へよ梅花を見たる所
梅の花匂ふ野へに来て宿の梅そ待かね〳〵ん
第三帖

湖辺春駒
春の野に湖の汀の駒も心は春に引れつゝ
　山辺に人家花盛に咲たる所
さくら今雲かと見えし花のあとにはなく霞山
　人家庭前夜桜咲たる所山に木もあり
よろつ代の春をかさねる宿の花雲井に見するも
第四帖　夏
　人家更衣する所卯花のさき咲たり
今日よりは今代にかへて見るも卯の花
　賀茂祭神館にて祭る人見物し
たりける
今宵見し神もかくのこれまてある人の手もてなし

早苗とりしころ

早苗とる田子の衣もしほれとそよく秋の風そよくなり

第五帖

雲間郭公といへる事を人家にて

思ひきや月まつ宵の郭公さしも待たれし名残なりとは

菖蒲かほるといふ事を人家にてよみ侍りし

風かよふ夜半の枕にかほりけりあやめの軒のさしそへて見ゆ

人家の庭に花さくといふ事を

見せはやな君にこよひの庭の面の花さきそひて人待ちし

第六帖

山井遇水涼といふ事を人家にて

山陰やいつも清水の流れにて秋をもまたぬ音のすゝしき

杜間河夏草といふ事を

夏草のしけみにかくれ行く水の神なひ山の夏かけて下草

河辺に六月祓しける事を

夏はけふ日数つきぬる御祓川秋のはつかせ思ふ

第七帖

岸辺人家秋風といふ事を

夕されは野山の風もしらぬ人秋をしるなる庭の荻原

野花秋多といふ事を

秋の野の千草の花の色々にわかれて秋のあはれ

山路林間秋月といふ事を

秋山の松の木の間をもるかけに秋としもなき月の影

第八帖

人家池辺人之旅且行

そら清るみかやは池のつまに水をきる七月ゝ出る也

相坂関ニ駒迎ニて向所清水有之

新勅撰

あつまよりけふあふ坂の関越えて都にいつる望月の駒

田中小人家有之所

山田もる僕か庵はさひしくていかにしら宿の秋の夕くれ

第九帖

山井に菊流之所さかしき島に仙人有之

新後撰

君か代は白玉山の白菊にいくとせ流れてつきせぬ淵

山路并人家ニ紅葉有之所人々旅行

紅葉のちりゆくかたにさそはれて風も手向そさそふ紅葉

海邊に鶴たち有之

ほのゝとあけ行浦は霞にて奥津白浪

第十帖

海邊千鳥ある所あまた人しかや

有之

友千鳥奥の浦浪いつる家の松風夜さむなく声

網代ありし人のすまゐのところ宇治霞

有之

そゝ花霞は都人の心まて日ねもす寄せてのみなと

江邊ニ芦しける所も有之

鴨は芦はまたうら旅にゆく袖の毛衣

第十一帖

谷に年のこころ

小夜ふけてこよのあらし此たひの衣ぬかしもよる雲の山院

摂政殿の家上御歌合儀式

山里の川音にしき夜はしたてにたのまし顔よしまさる

　稲荷山つまかりし宗行

中十二月

宮に雲やおぼろうえうつの末枯れてしまさ冴えかへり

内侍所御神楽

雲の上に神も悦ぶ人のまき夜のおなじ星のしるし

山路なりしかきぬなしやとそふかりのこころ

人家あるし

よそにみる人のたちもたえて霞此外此小かげ此宿の

藁屋にして人木山のあらしなるらし

まつはいけるとこ語

千代経べき末まで山の色に斧おりしつもりいとなき

ちりまいまで

泥絵御屏風

夏

樹陰納涼

夏山草葉風にまきちるしえさし秋はや知らぬ大荒木の森

冬

地上氷

池水に去年ふみわけし氷は日比もむすぶ今年なりけり

院に入道親王九十賀給

俳風行

春帖

霞

平城池 入續後撰
春霞しはしは衣のかけかへていく日かすらん天のかこやま

若草

み吉野ハ芦はかりまたのこるねはしも雪今やもゆらん

花

おしなへて峯も白雲道ハさかれん霞ひらけの花のしら雪

夏帖

郭公

名のり
まつかゝる人や声たに時鳥二こゑのひとこゑはきゝつ鳴らん

五月雨

小山田に引しめなはのうちはへてくちやしぬらん五月雨の頃

納涼

手結やいはゐの清水のよとまぬ流の末の涼しさを後ほとになれ

秋帖

秋夕

吹か（か）せの入相の秋にしてなへて涙の誰書こめて草むらの夕浅ん

月

新後撰
よし野河ハ秋の河瀬の人めかれて衣かへしのゝの月や待らん

紅葉

山あらしの峰の嵐に出てよそに見し楷は木ゝ付にそ利

冬帖

千鳥

なにはかた汐よりいりえの松にちとりなくなるみなと

山

清涼院
泊瀬山の尾上の鐘は霞もはてぬ山川の音

雪

ふりつもる雪とやきゆる音すらもなし跡たえぬ山
今上一品宮生させ給ひて七夜人々よみ侍りて

祝

光ある千とせのかけは名に高き山も世々のかはらぬためし
中院前内大臣二月晦秋久
君か代の月の秋のためしにて千歳の数そかけてまつらる
庭梅久芳

万代の神のめくみの花ならは幾世も春にあはんとそ思ふ
従新前中納言松延齢
千代まても契の心やかはらねは松のことの葉のみなと
大臣従二位前中納言松不改色
春の色は一しほますとなるまつの松の千とせのかはらぬ
かはらぬ山の松によせて
千とせの世の中の春日山松のみとりにふかき色かな
従二位
君か代のちとせの春のまつ風にちきりをむすふ千代の行末
君がよに千代のかはらぬためしとて君か代を千とせのやとの
みなとの松のこすゑにてあすの月のかけもかはらぬ春
千世やちよ世に栄えん行末の松の枝の常磐なる君かよはひは

入 おのつからねかひきはまりなき世やゆたかなる人たらしめかしこき山への宿

（続古今）神風やみもすそ川のなかれこそ月日とともにすむへかりけれ

院にて殿上殿初度御会に池上松風

（新後撰）池水にうつれる松の池によりて世をちきりし松かせそ吹く

院にて殿上歌合に寄神祇祝

（勝）君か代はまもらむとて御裳濯川の岸の松もこともちよかす

院にて十番歌合神祇

神風やみもすそ河のうけてこし流れはたえし和かのみなかみ

庭松

庭の面にしけりそふへき君か代は千世の松の陰そこに行

院新院にて松遐年多

たかさこの松はみやこにうつりきて久しき世の緑やみゆらん

家にて歌合に春祝

入（勝）春日山都の南しかそおもふ北の藤なみ春にあへとは

院御会に初春祝

春といへはまつ萬代のはしめにてくち葉のまつはいくよこもらん

和歌所初度御会に松月夜涼

（勝）春風にかすみも秋の霧もなをいつも雲ゐに月やすむらん

城南にて御遊御会に社頭祝

氏の中にいのりのまゝにかすかしき南の宮にちかひおほやけ

京極殿初度御会に松有春色

入 おしなへて木の芽も春のあさみとり松にそ千代の色はこもれる

恋部

恋の歌よみ侍りける

おもかけの夜のつらさはあけてしたに人をこひつゝや
白雲のかゝるひくきやま風の月ひとりむすひてそ秋は
たゝわれひとりふかすひとあはぬそこなきゆふくれ 夕暮も

秋暮秋恋

秋の夜もしのふにつけてよろつ心にかゝる夕暮かな

小野小町合す久恋

いつはりあるの袖もまちぬれぬるはいつはりなき時もなし

積代人恋

まつ契る人こそいとたえしこのあはれはなきものをつれなきや

風前恋人

ひとりぬる枕のかせもわすれしも人まちかね 紫式部

関忠秀増恋

ひとり寝の枕のうへは宿りせしその旅の夜はとかく寝て

盡夜思恋

ひるはたゝひとりなる思ひに夜もふしまよひつきのそ

月前恋

また我かうきよに袖のしつくかな神よりきこえし月の 影も

船中恋

うき舟のたゆたふこゝろかな浪にしもあらぬ涙のしけき

恵能僧正

いつかひとりまちわひぬる人の袖の香しきと

三位恋

たのめぬる人まつよはの雪やそれかあやなきらん

後胡恋

わつきの露のまよひはたえにきてぬるまもさらせてしる

十二首并被講中恋

明風と寝やかりふと向ふのうらみもれなし春の一なる

恋十

まちわひし床も枕も涙にてしきたへの袖の月やどしつ

物思ふきてひとりぬる夜のむしろにはわか衣ちりつゝ夜のつゆぬ

思ひ寝の夢にはうきも枕の露の夜半のむしろ消

ゑるかわく涙のたえぬるみにまかせて時なくぬる神無

後たく神よかけしやあさるらんなるむかふしも冬さえ

冬寄のうみたてゝのすまのくゆきさて物思ひ寝ぞさえや

こゝめこうし君松をのひかくは物思ふ宿のなものたかりく

落瀬はつの瀬の涙の恋こしてさえあへぬ袖のそでぞ恋や

思ふほと思ひしるらん難波世のもしほたく火のそこなしく

それは松風のゆふけしきもあり雲のたえまもあらし

山井の水もとめてぬ袂のあわれなくまなき月のあり

水無瀬殿の月十三夜恋十首并歌合

春恋

うきひとの見ゆるかたの浪とけぬまに松風袖はむすほれて

夏恋

芦辺わきこえ夏草のしのねはうらみて袂こそかはく

秋恋

さく袖の涙ならや秋の夜すがらも荻の上風

冬恋

わかれのちをしのふ寝ぬさまだくまれのさえかりてもいくせ夜ぬらん

暁恋

勝 ありわくも名のみ白む岩こえて[illegible]しぬ袖のよそ

夕恋

勝 誰ゆへと思ひもしらぬ夕ぐれに待いでしこそ山の端の月

羇中

負 うつゝにも夢路の道とて旅行人はたえたれど

山家

勝 山ふかみわきかね夜たちひわしくひとりそ月や秋なけれど

古寺

負 すむまでも契りてとひぬ古寺の宵暁の松風ぞ吹く

旅泊

持 あまてるともとのかぬ磯のまくら枕むすひかえ浪の[illegible]

旅路

勝 旅寝やいせ世路とをくみ山[illegible]袖のゝ[illegible]

海路

勝 うら風に[illegible]すむしてもまよはれけり

河邊恋

勝 初瀬川のそこにも流れ岩のよどみ[illegible]人そ恋しき

寄蓬

持 こぬ人を[illegible]夜のあかつきの[illegible]恋つゝやみん

寄風

負 萩原やよそにかよふ秋風のたよりに[illegible]

院の撰哥合に遇不逢恋

持 [illegible]山の端の[illegible]

勝
同家歌合忠恋
後拾
早瀬川みくまもれてそこれたゝすやまてるとこそれてなし
同家歌当日九月十夜
入新古
よそにふけつゝあひそ涼しき夜や八矣し山の端の月
同家歌弁後朝恋
を
たのみし神のをしへにまかせつゝひとりのやまかつらおもひき
同家歌寄暁恋
よそに成けりしをきてもきさや思ひまたまた暁の袖
和歌所にて初秋新信初恋
拾
逢の浦も人やのとりさまらふしも思ひさふる人の
久恋
入拾
新古
難波人のいるえにかゝる桜のかへしこそまたまたつゝ

拾
家の歌合夏恋
ほつきゝはなく葛やよそに森かけのしたえぬ袖をとめきて
歌合のうちに裏契後恋
川人のちるにも心は見れとあはぬみえてはなれそこてめくる
宇治にて院の北面歌合中秋恋
入拾
待ちわびぬは人の月をやまのはにいてゝの花のそらの白雲
小野宮歌合忠恋
もゝしきのまちくる百間の夢をみしよりはやさつ
羅猿部　猿方十五首
拾
流れても溝の岩間の流の上ながら夜のなかなるうき旅人
門
露こそけふの山のはのこゝろくゝ白はぬとはまし
門
草もゝはらはみちなきはらのあさくらの枕を

持
流れくる川竹の下ゆく舟こめて旅路行く淀の川きし

持
けふもまたやどりをかさね暮れて山路越えゆくこのもかのも

同
なみだにぞ袖ぬれて越えまさる山のよしの道をとて

同
うきくにかみや白雲の嶺のそらにかけて重なる

同
なけくて草葉の宿の秋のねよかくれ[illegible]の袂

負
かりねのつまとせよいかにのみ消えてしまふ

持
月の雲の浪と共にいくたびも忘れぬ旅の夢の

負
わか人もなき旅路にて[illegible]の山

持
秋風やまた一夜宿かりて里のわか[illegible]別れ

同
きのふは[illegible]山にも[illegible]やまのこすゑ

持
世の中は[illegible]のたよりにて[illegible]

勝
涙まで一夜[illegible]わかれしめて[illegible]

あめふりて[illegible]の前
前さくら[illegible]袖さへ浪さそふ[illegible]

又御製 旅行 海路へまかる道にて

あさ夜ふけ山こえてゆく[illegible]浦波

新勅撰
はるかなるみのたけ[illegible]いくせ[illegible]

海路眺望

入 持
いさりびのいまはの月かげかすみて明けゆく[illegible]

海路旅

入 持
沖つ風の白浪さそひつつ[illegible]の

家隆　参議雅経

勝
又続や秋をさむく[illegible]のかもめ

院宮[illegible]御製[illegible]

入撰
うしろあれはかせハまつこともなさむしろまよひその猿ひのかのみの秋をと

従二位ハ梅若丈弄ノ合ハ前内相中

戀

勝
なひき合ひわれも北補て後とも令てしはやとのなう

院新借ハ花ニ月ノ猿

わすられよ後ハくれし面影ハうつし物こなたのつき

後京くハ由花ノ猿

入撰
起ハそのとつてハここらきてもなくつくし山ちかけ

雑部

於頌ニてよめる

木

年家にてるぬれて松山おもひしきよ花とふきちとのかのか散り

火

思ひ寄し新世の紙ハうかふ火ハよ世にしるせおもふかなりけり

土

なしうへて世の下なる人ハされつらでともに咲てありとこそさけ

金

ちんせまで長き宝となるの起ハ佛ハみなく金なりけり

水

清くすむ心の子に水しきよされしと宮の月の影映

木

月日もかく宿をもむかへかれもわきさ夕べのうちなりけつ、

日

秋風も入日の光も積もりのこともみそれハ秋よりなお哀なり

南

さきつさくへ墨の秋風に遅しむつ人袖かりのこゑ

北

うすくしもそのまゝ家にまよひそろたゆくれ

中

前ちり都もおちこの里ハ花ちる我ものゝ光半漱々り

青

浪わたる姫若菜の若のみまても松の木深さうつゝ夜々り

黄

秋は白の花のきくに咲菊の枯葉のうよまむひかりに

赤

わが秋に峯の入日の影からぞふくた深山の光にしる紅

白

秋ふかむ桜花の雪まちいかなる水に宿る月のさむけさ

黒

さらでき深山のさとの夕闇に秋そうらむ鳥ぞ鳴也

暁観佛

よこ雲のさてひらくる四方の花さかり暁おいて月の光秋

夕聞鐘

入逢の鐘の音しけくこれこれとて法の声がわかる

夜聞僧

深めて花をまやかたる浦の花の鐘の音の床で

暁

かすみに入るちりあわれるのきの闇のさけせとおりくる

山家十五首

負 住さは深山のおくよ世こそやはなれてすむ人のこゝろなる橋と

持 山かけや岩ねの苔の下にゐてかゝる所の人有なれはそ

口 山里に獨すむ草の庵には夏一夜よ秋の風をきゝてこゝろく

口 月見んといとひしみの人のこそ落葉のうへよ落葉をさき庵

口 世のうきの移やうしなん山川のすゝしくさゝのとをよふ萍

口 春の色をうち山のあひその花たゝ雪も知らぬ山ゆきはちら

口 かけとそめのうき世いてならす京の庵よりのかへる心ハ松の花

負 山家住も春の人目ハかれなくてまきのこゝ苔の枕にすゑ

入持 かりそめにおもひし雑京住ともこゝも山の庵の苔のしたみち

負持 いかにせん夏の世のよにかりそめの深山の庵の夜半のあはれは

負 住人のかなしき我身もかのたりよ秋の月わひの住かし 補入

持 谷の苔春のひきとけ流れけりてもあらて岩根の

勝 いとゝ我思ふ奥山の庵もなくや笹の枕を

持 足引の山かけふかくいとふれ木葉もはく日くらしの声

持 世のわたり(?)かねてやまさき山深(?)玉松(?)のこゝ(?)の松(?)の

流石八幡若宮歌合六首内山家松

持 住そての人ハ絶なき岩のもとよ涌も松の色をたゝ妹かり

流石春日社歌合三首内松風

負 夜時雨(?)けり(?)すれて(?)のみ山かけ(?)ら移みこの松風

夏中述懐

うたゝ孫の身(?)ハ夏かけにたよりの里の有(?)りの身に

勝 けしきも世なとかさにん(?)にとも(?)なきいとふき(?)のはしき

入 世のいきかハ人の心のうきそらし住さやまん都のかたとも

渕も瀬もいかにさためん涙川人の心のはやくかはらは
たらちねのやかてなからん後の世にこゝろにかゝる
住吉の世をすてしより松山
つらきよりあはぬうらみのつもれはや花のちるらん
松しまのあまの心に深くてそ秋毎の月をまつらん
たまさかの月日のかけてもちきりつゝやかて忘るゝ人をうらみき
照らし月日はてゝかはらぬとまつらんあはれとはかり
皇太后宮大夫入道かゝりし人消息し侍
しかすかにいひつゝもしらぬ
秋のこのはもてしきしけれはまたおもしろみ松の風に
同し
君ゆゑはこゝろの松のうきをしのひて

前大僧正のりとをり
世の中はうきふしのみをしけく見てなにとてかくはなれる身なるらん
いかにして嵯峨の里にすみつゝ消ぬ人の名をかれ
同し
世中によしや神をはたのまれし
君をいかにかゝる命のうきをやすらん人の嘆きを
天王寺にて
新後撰
秋なれは心のうちそ浮世の難波に人は行あらん
述て三十首のうちに
高倉
春
春すきて夏きにけらし白妙の衣ほすてふあまのかく山

夏

枕流

枕ニてうつゝき此流の名をこそみれ、涛もおのか身を洗しかゝを

萩亭

秋

萩原や松虫の秋を語りかはてわすれむ床のさむしろ

冬

山寺の八旅の影ふしろ木きそ夜ちかきとき入りしの声ぞ聞ゆ

鐘の音

庭

月されかく中にもきて鳴こゑも、その夜の秋の風のみゆ

旅

夏またおもふよまれ旅行人ゆくまゝ月にさそはれ行

淋水亭

天の川かれや岸ふかみふみて白波のたつ淋の水の名をみ

和羽林次将大夫に送

わか明此月きり山ちかく好みしさうき世は宿におもひ忘るゝ

合利請次恩亭

春秋の花のおもひ此木に同しをりの花まかせぬる

八月十五夜お花見にて

露よや月まち年又いまやおもふしもさ宵の雲は晴にと

いかなる晴の月のかけ見る秋の心はいつかくもらん

右

三年まて雲も月を晴れは花さとふみてとまるかな

さ宵とてまれゆく月のひとりかきく秋の雲にかかれ

延秋門院かくれさせ給ひて次の日宿直し
りけるに
露けくて[illegible]行衛も[illegible]のよそに
いつかたへなき[illegible]あとにて[illegible]
ゑみし
よそにしもなみたや袖に[illegible]
君なき秋ハその道の[illegible]のつらさ
院にて尋ね侍御会に
住吉の神やあはれとにこよ[illegible]袖の露
いとゝ晴るゝハみよし[illegible]
今しくも月[illegible]のこゑ[illegible]
長清郎

従儀坂内府墓所にて懐旧の心をよみ侍る
山里ハ神の[illegible]前[illegible]秋の夜月
ゑみし
よそに見し[illegible]
[illegible]
前中きてよめる
まれなる[illegible]
入道[illegible]
[illegible]
入道のりやすより
かきつく[illegible]

せし

又愛別離やすきまゝにふかく思ひ入ぬ

六帝詠

前内相府幽霊一掃東閣之月永北小
蔥之煙心来去文治中四之春忽入我
夢以墨詩句達冬十二之志又入人夢語
彼以佛永別之別是近之夜開曉之觀莫宏
縁之集漸積壊之根自敬着欲愛心縁心
棘之鑒称奉又之幽思毫

又愛別離苦の所しきハかりそ孫子のゆめとさくまて

文治年
八月十五夜山法師のもとへつかはしける

へこうしき親せる人に苦しき人一かひ世の月ハみえまし

せし

いかにせん都の宮まて月ハ心をやりてふくふきもや
こしの法師、みはらうきつきのとう定家朝臣
なりしときかなしきつ

菩提のゆきのもとに法浦しくのあつらのいそのきにしき

せし

法のともこつゝき法しき春はるまて夜ありてよみける
定家朝臣母の事法三月えてまかりけるに

又ある時みあつまみて心の中のありし人のきへの別人の事

せし

別にし身の弁事ある清くて心あるなくての御ハ折たてまつ

別ト
彩に

観性法橋ら始て波収西山法性院まて姫法師
くとてよわいまゐりけり

前権僧正

人のいふ秋の哀ならぬかき、なに山このゆふくれのそら

むし

やしわらし吉秋なへおひ花くる宿ときゝ給ふ

世のならの事まさかりひて

法そしへ世代への後のこしまなるひく霊泉

のらのよふおもてとしてゆ前の事をつり月よ明暮に

とり出ひくの人の縁とらて許り末ハひとら白くとも

前権紀

後撰ホて

彰右

被世やみ年ていおかれみよい路漸法皇のまつかたゝ

後撰集

後詞法やうかひそ志ら被かぬ様く、すまう事まさ世とま玄

露みくまくの暮物玉ゆとも是き城守の夏やとまり

春の神前

京を、宿春の暮くをまつ月の神の松もしくらかうか利

前権紀のみつ年ホ

和くる光の苦し春の月の恵の花ハさく世殿の第と

三笠山積らへ和の路よりて是もよはく五月雨の代

このしへさくその川せのかこつひて行のゆるハつ世とさくらく

拾遺後撰

日吉の社

大宮

左乃路の林の花の花のにらひとさまとるさ旅のつく風

二条

業姉

指
朝日に消ゆるかと見えて秋山端[illegible]しぐれ
一豊真子　阿弥陀
道さかへこの世は後の為[illegible]奈良の京
八重　千年
粧ふ積るほど[illegible]神のめぐみの[illegible]
宗人　十一面
入〔指〕漢[illegible]
うてな文殊いでて[illegible]の白根や高ねより
十禅師　地蔵
入〔指〕
〔撰〕
ありと見えて世の[illegible]道[illegible]の月
三文　善賢
貞
紫の[illegible]
浅茅が月[illegible]の今の暁月

〔指〕
民のかまど[illegible]月の[illegible]
釈教部
漢[illegible]
舎利講は次十三夜是ぞ
[illegible]の[illegible]世に[illegible]
性
[illegible]今[illegible]
神
〔新勅撰〕
[illegible]
力
[illegible]
旅
[illegible]

因

植しおく佛のたねのかたけれは岩にも松は生ひ出にけり

縁

岸よりの風のさそふに法の舟海にうかひて

果

秋ふかく成てにほふ深山木の花の枝しも木の実なりつゝ

報

すゑ/\をはるかにとや花さくを見えん結ふ所ありてひらく花

本末究竟等

木のもとも末もさかりにさく花を神かはれなり

因秘菩薩行

千載

いつとなき鷲の高ねにすむ月やかくれはてにしよをてらすらん

舎利講

衣のうらにはかけしとて鷲の山はなをし照さん

同講にて花を

草木まて心ある花の法の庭花さそふてや春の山かせ

喚子鳥

よふこ鳥世にはなさきにひかれ入於深山思惟佛道

立秋

西思へは心のいとゝ涼しきは八そとまりの秋のはつ風

哀人の夜半の秋をいまのうちにしるしもおもひめくらすかな

嘉永二年七月十六日

猿の世はまつよひ人々の有めかしき波の月を見れは初秋

河為人家

かころ江は清の流の道ひいて人とそ住まて白川のさと

池

極楽の家はふ極楽なれハ八功徳池のたゝす流なり

舎利講次道

五せうの蓮のいとよむもかれおの心れひく家かな

建久三年十二月廿六日書写之了此合點者前
大僧正釈阿入道也人之點不可有之人
歟
權大納言藤原　在判

家百首
勝五十六首　負十五首　持二十九首

五百番歌合
勝五十首　負二十八首　持二十二首

老若歌合
勝三十五首　負五首　持十首

惣勝百四十一首　負四十八首　持六十一首
此上二帖　式子内親王

春部　勝七首　負一首　持四首

夏部勝七首　負一首　持四首
秋部勝六首　負九首　持七首
冬部勝十首　負八首　持八首
恋部勝十六首　負六首　持四首
旅部勝十四首　負二首　持六首
雑部勝十首　負六首　持一首
神祇釈教勝一首　負一首　持六首

通
勝八十三首
負三十二首
持四十六首
并已上百六十首

或本ニ是ヨリ奥ナシ
安貞二年十一月六日以前宮内卿家隆卿自筆本云
要有ノ合雖有之無雑乱依合様ノ
詮なきによりて書写之
文永六年十二月十八日
右此本者冷泉黄門之御本也卒爾ニ書写之人
所望并校合ノ乞ニよりて依之
應永十七年六月廿四日　散位藤原政
年号和哥所本也以校合之乞不被遊ヽ也
應永廿七年霜月八日　民部大輔
右校合二度也

于時文明六年神名月廿七日書寫之畢
河原玄観
行年六十余歳

右一冊以竹内彦治郷正本書寫
し校合之畢
嘉永元年神無月日

110X
602
1